

空、風、星、そして光
の種

ryanzi

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

そして彼らは生きるのです。ただ、失くしたものを探さねばならないから。

このお話は、その昔死んだ男と、人間たちの病気を治そうとした医者と、そして繰り返してきた魔法少女の紡ぐ詩です。

目次

(まどマギ世界の)二十世紀人、(まどマギ世界の)二十一世紀に転生する	1
医者との出会い	10
時は世紀初め、世界は光に包まれた!	18
ポケットに両手を入れて、出向っていく	26
人間不信になった従者	30
そして料理少女は泣きながら調理する	36
戦う乙女	44
もう一つの拠点の存在?	50
ネジレ探偵	55
優心の家に向かって	61
手記	67
水名見物	77
次の物語へ	84
拠点発見	89
二木市の魔法少女との駆け引き	98
審判を下して	105
最後の復讐	112
復活の混沌	118
日の本に悪鬼をもたらした元凶?	125
別れの挨拶に来た元復讐者	133

206	Library Of Liberty	195	Salvation Of Yakul	184	無関心の代償	176	せめて、人間らしく	164	果てしなき流れの果てに	161	最初の第一声	151	新しい人生	146	私は私	142	自分自身への怒り
-----	--------------------	-----	--------------------	-----	--------	-----	-----------	-----	-------------	-----	--------	-----	-------	-----	-----	-----	----------

(まどマギ世界の)二十世紀人、(まどマギ世界の)二十一世紀に転生する

時は七十年代初頭、大学生の田中鉄雄(ノンポリ特定の政治意見を持ってないとされる学生のことを指すが、どうしてノンポリなのかも理論武装しないといけなかったらしいよ。だから、あくまで自分の意見はあるけど学生紛争側に積極的に関わらなかった人たちという方が正しいね!)は学生紛争で総括知らなかったら検索してみよう!されてしまった!

「そういうわけで、あなたには転生してもらいます」

鉄雄ははつきりと自分が死んだということを理解できていた。

「・・・えっと、輪廻転生というやつか?」

てつきり、俺はご先祖様のいる黄泉の国に行くもんかと」

「あの世も複雑なんですよ。色々と。」

私も生まれてから間もない新人の神様なのでよくわかんないんです。

とにかく、あなたには転生という判定が下りました。

別の世界かどこかの時間に転生してもらいます」

「そうか・・・来世は理論武装しなくてもいい世界がいいな。」

「そうだな、二十一世紀がいいな。未来は少しマシになってるだろう」

「未来の世界ですか・・・藤子不二雄の漫画の世界はどうですか?」

「いや、漫画じゃなくて現実の二十一世紀で」

「漫画の世界は理想的だが、おそらく進歩についていけないだろう。」

「現実だったら、そこまで派手に進まない」と鉄雄は確信していたのだ。

「現実ですか・・・少し上司に連絡しますね」

彼女はモールス信号の発信機を打ち始めた。

数分後に、気送管らしきものから箱が落ちてきた。

箱の中には、三十センチの赤い水晶が入っていた。

「鉄雄さん、冬眠許可が下りました。」

封印措置を施すことで、二十一世紀までの冬眠が可能となります。

「それでよろしいでしょうか?」

「・・・ああ、大丈夫だ。おやすみ、女神様。ありがとう。」

「そうそう、俺を殺した奴らに閉してだけどき・・・」

「ちゃんと、罪を償わせた後で幸福な人生を送れるようにしてくれ。」

「俺だけこうして来世で幸せになるのは間違っているような気がするし・・・」

確かに殺されたのはムカつくけどさ、お願いだよ。

あと、親父たちの幸せとかもお願いな」

「・・・わかりました」

そして、封印は施された。

「それにしても、現世は怖いですね。

ファイルを見る限り、この人は正気だったのに。

いえ、正気だったから殺されてしまったのでしうか？

既存の宗教と先祖に敬意を払うことができている、

出自関係なく接する寛容さと自分の確固とした政治的意見を持つていて、

なおかつ、自分を殺した人間たちの幸せを願うほどに慈悲深くて・・・。

生まれる時代がもう少し遅ければ、長生きできたかもしれないですね。

そもそも、この人の出身宇宙自体がまずかったですね。

異星文明、魔女、魔法少女・・・平和とは程遠い世界ですから」



時は二十一世紀、昔は新人だった女神も今や多忙を極めるキャリアウーマン！

「愉悦を求める邪神たちが一般人を殺して転生させるのも彼女の忙しさに拍車をかけていた！」

「ああ、クソツたれどもが！どいつもこいつも転生かよ！」

異世界転生、リリなの転生、鬼滅転生、ジヨジヨ転生、マギレコ転生！」

堪忍袋の緒が切れそうな彼女を天使が宥めた。

「女神様落ち着いてください！」

「……すまなかつたわね」

「それに、マギレコ転生を選んだ人ぐう聖だったじゃないですか！韓国人でしたけど」

「……まあね。昔はもつとぐう聖とやらがいたのにな。」

あの頃は誰も異世界転生なんて知らなかったもの。

願いもささやかなもので、ドラえもんと友達になりたいとかだったわ。

それがどう？今だとチートやらハーレムやら……。

しかも、前世で関係のあった人間たち全員不幸を願うこともあるし。

はあ、二十世紀の時の方が良かった……」

女神は最初の仕事のことを思い出した。

「……いえ、最悪だったわね。」

腹に満たされもしないイデオロギーとやらで他人を殺してたんだから。

そういうえば、もう二十一世紀になったのね。

そろそろ起こしてあげるべきかしら？

事実は小説よりも奇なり。まったく、進歩しすぎたのよね。

適応できるか不安だけど・・・仕方ないわね」

彼女は書類がたくさん溜まった机から水晶を引きずり出した。

大きさはずつと三十センチのままだが、中に鉄雄が入っているのは変わらない。

彼女が魔法陣を刻むと、水晶は光を放ちながら崩壊していった。

そして、鉄雄が起き出した。

「ふわあ・・・もう二十一世紀？」

「ええ、二十一世紀よ」

「あつ、女神様。おはよう・・・なんだか疲れてない？少し休んだ方がいいんじゃない？」

「いえ、大丈夫よ。とりあえず、二十一世紀に関して簡単な説明をするわね」

女神はスマートフォンを取り出したが、鉄雄には奇妙な板にしか見えなかった。

「ソ連は二十世紀終盤で崩壊して、アメリカがイニシアチブを握ったわ。

でも、そのせいで逆に中小国が不安定になってしまった。

技術はタケコプターやらどこでもドアみたいに進みはしなかったけど、

コンピュータという技術が大幅に進化したのよね」

女神はスマホを操作してみせた。

「これ一つにカメラ、テレビ、新聞、電話、様々な娯楽……」

色々なものを詰め込めることが可能になったわ」

「へえ……未来人は本当に賢いスマートですな」

「使い方はそうとも言えないわよ。あなたの方が賢く使えるんじゃないかしら？」

「女神様、餅は餅屋だ。二十一世紀の人が上手く使えるに決まってる」

「さあどうだか？餅屋は餅の作り方を知ってるけど、食べ方を知ってるとは限らない。

それどころか、とつても不味い食べ方ばかりしている愚者かもしれないわよ」

女神は悪態をついた。

「……口悪くなったな」

「……最近、ほつつつつつんとうに忙しくてね。」

まあ、あなたに使う時間だけならあったのが奇跡なくらい。

そうそう、政治思想に関してだけど、共産主義は当然崩壊よ。

クマムシ並みになぜか生き永らえているけど。

それ以外には……人権思想がさらに拡大したことね。

女性がさらに地位向上して下手に口応えしたら死よ。

まあ、あなたのファイルを見る限りは適応できそうだけど」

「わかりましたつと。じゃあ、今から転生ですか」

「ちよつと待つて。準備するから」

二人の近くに穴が開いた。

「飛び込む前に、転生特典を言つてちようだい」

「特典？なんじゃそりゃ？」

「・・・そうだった。あなた、最近のムーブを知らないんだつたわね。

今では転生する人に能力とかのプレゼントをするのよ」

「学力とか運動神経とか？」

「そうそう、そんな感じ。あと、必殺技とかもね。

まあ、学力とか運動神経を増やす必要はないと思うわ。

深い意味はないけど、何か必殺技があつたほうがいいんじゃない？

深い意味はないわ。何度も言うけど、深い意味はないわ」

鉄雄はしばらく考え込んだ。

「じゃあ・・・真空斬り赤胴鈴之助に登場する必殺技。鬼滅よりも過去の漫画なので風の

呼吸のパクリではないで。子供の時から一回はやつてみたかつたんだ。

もちろん、人に対して使う気はないけど」

「・・・そうですね。予算不足だから難しいわ（適當）。

その代わりに、この刀をあげましょう」

彼女はドラえもんのみつ道具である電光丸を彼に渡した。

まあ、鉄雄が死んだとき電光丸はまだ登場していなかったのだが。

「この刀は二十世紀の漫画だけでなく、二十一世紀の必殺技も出せるようにしてあります。」

問題は、別の宇宙の二十一世紀の必殺技も出せるようになってきていることです。

下手に人前で使ったら、色々と言われるかもしれません。

まあ、そもそも話、その時点で銃刀法違反で御用になるんですがね」

「いや、すつごくありがたい。かつこいいし。」

これから毎日、何かお供え物をするよ」

「いえ、当然のことをしたままでです。」

それでは、良い人生を・・・」

「じゃあ、また百年後くらいにな、女神様！」

彼は穴に飛び込んでいった。

「・・・女神様、よろしいのですか？」

あの男性の出身宇宙というか戻っていった宇宙は・・・」

「ええ、マジアレコードとかいう作品の宇宙よ。」

当時は作品自体がなかったから私も知らなかったけど。

まさか、あんな作品の出身だったなんて」

「・・・大丈夫なんですか？

真空斬りなんてしよばい必殺技だと自殺そのものですよ？

ただでさえも二十一世紀の必殺技はインフレを起こしてるといふのに。

火力主義的な魔法少女やおつかない魔女、そして世界観を無視する転生者・・・」

「だから、あの刀を渡したに決まってるじゃない。

性能は抜群よ。映画と違って電池切れにはならないし、

最近の漫画のラスボスにすら対抗できるほどの設定にしたんだから。

あの宇宙には転生者がたくさんいるけど、そいつらも問題ないくらいよ。

愉悦勢の邪神どもにはいい薬になるんじゃないかしら？

最近のマナーのなっていない転生者たちも痛い目に遭わせたいし。

あはははははははははは！ざまあみろ！」

(・・・うわあ)

さすがに天使もドン引きした。

医者との出会い

二十一世紀の初夏は、田中鉄雄にとつていささかすわりの悪い時期であった。

孤児院で育つた彼はとくに捻くれることも無くすこやかに育つていった。

外でも友達は上手くできたし、孤児だということを馬鹿にした連中とも友達になれてしまった。

友達はできたのだが、何か欠けているような気がした。

いや、友達に何か欠けているというわけではないのだ。時代自体に何か欠けているのだ。

(・・・俺の時代と比べたら平和なもんだな)

彼は新聞を読みながら溜息をついた。

新聞の第一面は外国でのテロを伝えていた。

しかし、戦争でないだけでいぶマシと言えた。

問題は他の面で伝えられている情報だ。

いじめとか自殺とか精神疾患とか・・・。

数が増えていると書き散らされているが、鉄雄はそう思つてはいなかった。

鉄雄の時代にもいじめとかそういうのはあったのだ。

あくまで表面に出ていないだけで、数は変わらないのかもしれない。

二十一世紀の人間たちは余裕ができたあまりに、自らの闇に直面してしまった。

それはイデオロギーで腫物を隠している間は問題なかった。

しかし、「歴史の終焉」とやらでイデオロギーが無用になると話は別だ。

「いや、公園で何読んでんのよ？」

「さやか、俺には小遣いというものがないんだ」

鉄雄はゴミ箱を指差した。新聞はそこから拝借したのだ。

「後でちゃんと手洗いなさいよ」

「わかってるって」

小学六年生である鉄雄のもらえる小遣いは少ない。

まあ、もともとそんな必要ともしていなかったが。

初夏のさわやかな空気とは反対に、二十一世紀はどんよりとしていた。

少なくとも、友人たちはそんな困ってもいないのだが。

さやか、恭介、仁美、そしてまどかたちは輝いていた。

子どもたちは輝いているのだ。でも、時代は輝いていなかった。

熱情と狂気の1970年代は遠い過去のこと。

一度、パソコンとやらで調べてみたが、「団塊」と入力した時点で悲惨だった。

・理屈っぽい

・何も変えれなかった

・うざい上司

・あいつらのせいで日本は駄目になった

・というか何がしたかったんだ？

・ちくわ大明神

・何だ今の？

とにかく、厳しい視線が向けられていたのだ。

時代をこうしてしまった責任の一端は鉄雄にもあると思うとやるせなかった。

あの熱情と狂気の中で、彼は唯一冷静で正気だった。

それを他人にも伝播させたら、結果は変わっていたかもしれない。

だが、神戸市立大学において彼はそれほど勇敢でもなかった。

最期の最期で勇敢になれたが、右の学生からも左の学生からもリンチされた。

もつと言えば、「西」からも「東」からも。

(・・・あの街、今はどうなってるんだ？東西対立なんて馬鹿らしいものは消えたのか？)

気にはなったが、行く気にはどうしてもなれなかった。

別に神浜市民が嫌いというわけではなく、過去に自分が死んだ場所を見るのが嫌なだけだ。

彼は新聞を丁寧に畳み、ゴミ箱に丁寧に放り入れた。

「また別の誰かが読む前提で捨てなかつた？」

「なんのこつやら？」

彼は水道場で手をちゃんと洗った。

まだ日が沈むにはだいぶ時間が残っていた。

しばらくさやかたちと遊んだ後、彼は一人街をぶらついた。

見滝原市は近年になって近代的都市開発が急速に進んでいた。

公共機関から一般家庭までタッチパネルも遠くはないだろう。

あと、二年後にはもう実現してしまうのではなからうか。

でも、技術の進歩に比べて人間精神の歩みは非常に遅かった。

このままでは、取り返しのつかないことが起こるのではないのか？

ふと、ある青年の姿が目についた。

初夏だというのに、黒を基調とした学生服を着ていた。

鉄雄はその学生服がどの学校の制服なのか知っていた。

大東学園だ。1970年代とはいくつかの箇所が違っているが、それでもよくわかっ

た。

その青年の雰囲気は変わったものであった。

まだ若いというのに、どこか大人らしさを感じさせる雰囲気は漂わせていた。

もしやと思い、声をかけてみた。

「・・・アンタ、まさか前世の記憶があるのか？」

危険な賭けだった。変人扱いされるかもしれない。

「・・・もしかして、あなたも転生者ですか？」

だが、賭けは成功した。

その後、二人は人気のない公園で語り合った。

「へえ、つまり・・・この世界はアンタの世界では架空の存在だったんか」

「ええ、気分を悪くなされたようなら申し訳ありませんが」

「いや、いいよ。もしかすると、アンタの世界も別の世界ではフィクションかもしれない
し」

「それもそうかもしれないね」

さらっと世界の真実を知ってしまったが、何ということではなかった。

藤子不二雄だったら好みそうな話題でもある。

彼は二十一世紀を見ることなく死んでしまったが。

この転生者、里見優心という青年は前世は韓国人だと自己紹介した。言われてみれば、どこか韓国訛りが聞こえないでもない。

「僕はとくに深い意味をもってこの世界を選んだわけじゃないんです。

ただ、架空の世界の中では一番安全な部類に入るのですね」

「でも、神戸市は辛いんじゃないか？」

俺、前世は神戸市立大学に通ってたけどさ。

余所者からしたら、なんか馬鹿馬鹿しい対立があつたし」

「……ええ、僕の知り合いもそれで辛い目に遭いました。

でも、もうすぐそれも僕が終わらせます」

優心はベンチから立ち上がった。

その瞳には熱情と正気が宿っていた。

現代人と団塊のいいところ取りという他ない。

「神戸の東西対立だけじゃない。僕は現行人類の抱える問題の解決に命を捧げるつもりです。

命を捧げるというのは比喩なんかじゃありません。僕の命を持って解決するんです」

鉄雄は思った。この純情な意思は団塊世代にすら欠けていたものだ。

かつてノンポリと蔑まれた自分も彼のことは応援したいと思った。

「・・・なあ、俺には何が手伝えるんだ？」

「そうですね・・・もし、僕が失敗した時の後継者になってほしいです。」

今回、見滝原に来たのもいい転生者がいないかと探しに来たからなんです。

そこであなたに出会えました。計画の最終段階で、世界は光に包まれます。

およそ七日間です。しかし、途中で世界が暗闇に包まれてしまうかもしれません。

その後、暗闇も晴れるのは確実ですが、不安定な種しか残らないでしょう。

そうなったら、新たな力をコントロールできずに人間性を失う人が続出します。

鉄雄さんに頼みたいのは、その人たちを倒して光の種を回収することです」

「意外とリスク予想はできてるんだな」

「はい。でも、僕の計画を邪魔する人はいないと思います。

ですから、もしかすると何もしなくていいかもしれません」

「まあ、光の真実を知ることができるといっただけでも得かもな」

「そう考えてもらっても結構です」

優心は一息置いて、また話し始めた。

「とにかく、計画が成功すれば人類の病気を治せるかもしれないんです。

これ以上、病気の進行が進めば手遅れになってしまいます。

既にその兆候はあるんですから。技術に比べて人間精神の歩みは遅すぎるんです」

鉄雄も立ち上がり、二人は握手した。危惧していることは同じなのだ。

「またいつか光となつて会いに来ますね、チヨルヂン親友」

「ああ、楽しみに待つてるよ」

鉄雄は安堵した。自分は責任を少しだけ果たせたかもしれない。

何の責任かと言われれば、この時代を生み出した世代の一人という責任だ。

彼の同世代はあれほど壮大なことを言っておいて、何もできなかった。

むしろ、事態を悪化させた可能性だつてあるのだ。

だが、ようやく罪悪感に苛まされずに済むかもしれない。

・・・そう思っていた。

別れ際に、ある本を渡された。空と風と星と詩。

昔の韓国人の詩集だった。

平易な言葉で、清廉な世界を描き出していた。

時は世紀初め、世界は光に包まれた！

あれから二年の月日が流れた。

鉄雄も今では見滝原中学校の二年生だ。

本来は思春期真っ盛りだが、鉄雄にはもう関係のない話だ。

「・・・ふーん、そんなことがあったのね」

「チヨルチン親友も元気でやってくれてるといいんだけどな」

最近、新しい友人ができた。

彼女の名前は暁美ほむら、魔法少女だ。

魔法少女や魔女に関しては二年前に優心から聞かされた。

彼女の方も転生者のことは今までの経験で知っているらしい。

二人はいつものようにカフェでくつろいでいた。

鉄雄にとって居心地はさほど良くないが。

昔のヤニ臭さが染みついた喫茶店の方が好みだった。

神浜市の喫茶店はどこもそんな感じだった。水名区は例外だったが。

とにかく、そういうった喫茶店で夏目書房という古書店で買った本を読んでいた。

あの古書店は残ってくれているのだろうか？

「最近、まどかは神浜市に行ってるそうじゃないか。

お前も付いていかなかったのか？」

「言っただしよ。もうどうでもよくなったって。

何度もまどかは死んでしまっただけで、何度も転生者が邪魔してきて。

もう何かするのが馬鹿らしくなってきたのよ」

「・・・なんか、同類がすまないことをしたな」

「いえ、いいのよ。あなたはマシだから」

彼女によると転生者は基本的に下心を持って近づく場合が多いらしい。

その例外に入るのは鉄雄や優心くらいだろう。

「そもそも、あなた本当に転生者なの？」

「まあな。前世での生まれと育ちは二木市。

通ってた大学は神浜市立大学で、学生紛争に巻き込まれて死んだ」

「そこからして普通の転生者とは違うのよ。

アイツらは別の世界から来てるのよね。

私はその世界を創造世界と呼んでるけど・・・。

あなたはこの世界で死んで、またこの世界に生まれ落ちた」

「そういうことになるな」

「だから、私も気づけなかったの。」

あなたにとってでは完全に生まれ育った世界であって、

アニメの中の世界ではないという認識で振舞っていたんだから。

私たちのことをフィギュアのように見ていなかった」

鉄雄はこれまでのように懸命に生きていたのだ。

フィクションではなく、この世界を現実だと思つて生きていたのだ。

その真面目さゆえに、ほむらでさえも彼を転生者だと見抜けなかったのだ。

「気づいたときはすぐく驚いたわ。」

もつと驚いたのは、あなたが何の疑問もなく生きていたことだけだ。

どうして、自分の世界がフィクションだとわかっていながら平然としていられるの

？」

「こちとら形而上学が流行った時代に育ったんだぞ？」

別にこの世界がフィクションだからといえ、創作者の世界だって同じかもしれないだ
ろ。

それに、この世界だって多くのフィクションを生み出してるじゃねえか。

まあ、一種の相互作用みたいなもんだと考えればショックは和らぐんじゃないか？」

そう言いながら、スマホを覗く。

すっかりスマホなしでは生きられなくなったが、節度は保っている。気になっているのは、神浜市を襲っている災害だ。

「……これも魔女とやらの仕業か？」

「そうね。ワルプルギスの夜に違いはないわ。

今頃、まどかたちは物量戦を挑もうとしているだろうけど無駄でしょうね。アレはそんな作戦で倒せるほど甘くないわ」

ああ、参京区は今頃は大変なことになっているだろう。

あの万々歳とかいう店も大丈夫なのだろうか？

というか、そもそもこの時代まで残ってくれているのか？

「転生者がいるんじゃないか？」

彼女は鼻で笑った。

「何度も奴らが返り討ちに遭ったのを見てきたけど？」

「駄目みたいだな……俺の真空斬りでも絶対無理だな」

「巴马ミにすら勝てないわよ？」

外はだんだんと暗くなっていった。

それは完全な暗闇ではなく、うつすらとした明かりの灯った暗闇だった。

「いよいよ近づいてきたのか?まどかたち・・・負けちまったのか」

「いえ、こんなの体験したことがないわ」

薄暗い空がだんだんと光り始める。

遙か南東の方向に巨大な光の柱が立っている。神浜市の方向だ。

その光は眩しくなく、ほのかに暖かった。

二人はカフェの外に出ていた。店員や他の客も同じだった。

誰もが空を見上げていた。

空が完全に光で満たされると、光の粒が降り始めてきた。

その粒は一人一人の心に沁み込んでいった。

過去と未来、実体と幻想、精神と肉体、空間と時間の境が徐々に崩れていつてるようだった。

その先はよく空虚だと言われるが、何もない事ではないと鉄雄は知っていた。

「・・・^{チヨルチン}親友、会いに来てくれたんだな」

この光が何のために現れたのか、鉄雄は知っていた。

人類を治すための光の種だ。そして、優心自身でもあるのだ。

世界中で、人々がこの光の木を見上げているに違いない。

鉄雄は忘れかけていた昭和の暖かさを胸に取り戻しつつあった。

おそらく、そうになっているのは彼だけではないだろう。



巨大な光の木が神浜市の中心に現れた。

温かさを持ったまま、いかなるものに遮られることなく真っ直ぐ伸びていった。

そして3日間、昼夜を問わず光のみであった。

心を照らす光の中では、忘れられていた懐かしさと遭遇する。

人々はもう道に迷うこともなく、前へと進んでいける気がした。

ちなみに、ほぼ中心地にいたワルプルギスの夜は弱体化して倒された。

そして・・・

24 時は世紀初め、世界は光に包まれた！

まるで、光など無かったかのように、
4日間、世界のあらゆる光を飲み込んだ闇が続いた。

ポケットに両手を入れて、出向っていく

鉄雄は着替え、優心からもらった本、そして計算尺を風呂敷に包んだ。

刀を取りに行こうとしたら、院長が持つてきてくれた。

「・・・どこに旅するのは訊かないが、諦めるなよ」

「わかってるって」

そして院長は竹皮に包まれたおにぎりも渡してきた。

彼の作るおにぎりはどれも激辛なのだが。

「持つていけ、院長命令だ」

「ひゃい」

鉄雄は涙を流しながら受け取った。

別れから来る悲しみではない。

こんな劇物を受け取る屈辱感からの涙であった。

孤児院の玄関を出ると、ほむらが待ち構えていた。

「・・・本当に行くつもりなの？」

「ああ、そのつもりだ」

鉄雄はそのまま進んで行き、ほむらはそれに付いていった。

院長はそんな二人の姿を見て、溜息をついた。

「僕はね、愉悦勢になりたかったんだ……と言いたかったけどなあ。

まさか面白半分で始めた孤児院経営がこんな結果になるとは。

転生者が孤児としてやってくるとも思わなかったし。

でも、まあ、これはこれで面白いからいいかもな。

それにしても、ロボトミプレイをしたのはどこのどいつなのかやら。

まんまと裏切られたみたいだし……招待状が届くのを楽しみにするか」

そんなことも露知らず、二人は歩き続けた。

鉄雄の後を、ほむらが黙々と付いていく。

最初に沈黙を破ったのは、鉄雄の方からだった。

「なあ、俺に付いていかなくてもいいんだぞ。

あくまで、俺はかつての約束に従っているだけなんだから。

何もお前が自分から巻き込まれる必要もないんだぞ」

ほむらは呆れながら答えた。

「あなた、自分が弱いつてわかっているの？」

いくら武器が良くても、あなたの体が耐えられる保証もない。

魔女や転生者だっているし、もしかしたら魔法少女も敵に回るかもしれないのよ。私だったら、いくらか手伝えるところわ。

こんなこともあろうかと、暴力団や在日米軍基地から色々と拝借したから」

「不法侵入と窃盗かよ・・・なんか、すまん」

「いいのよ。あと、4日間の光が必要なんでしょ？」

それでまどかが無事でいられるなら、なんだってするわ。

あの子のことだから、変なことにはならないと思うけど」

二人はただ歩き続けた。

「・・・待って、徒歩で行くつもり？」

「鉄道だと神浜市のど真ん中に着くじゃねえか。

転生者や魔法少女は普段は普通に暮らしているはずだ。

もしそいつらが敵だった場合は、敵地のど真ん中に着陸することになる」

「・・・理屈はわかるけどね。いいわ、これくらいは苦じゃないから」

「そう来なくっちゃな」

「荷物を渡しなさい。私の盾に収容できるから」

鉄雄は刀以外の荷物をほむらの盾にしまってもらった。

刀は、彼の背中に背負うことにした。

「そういや、ソウルジェムって肉体疲労でも濁るんじゃないかなかったか？」
「濁りが遅くなってるのよね。これまでよりも格段に。」

もし、ちゃんと七日間ぐらい光が続いたら、どうなってたか楽しみだったわね」
見上げれば空は気恥ずかしいぐらい青かった。

二人はひと株の草もないこの道を歩いていく。

これからどんな期待、嘲笑、戦いが待ち受けていたというのだろう。

それでも、鉄雄は残酷な奇跡の時代が終わっていないという信念を持っていた。

二人が歩くのは、失くしたものを探すため。

ふと、両手が空いていることに気がついた。

両手がポケットをまさぐり

道へと出向いていったのです。

——尹東柱

人間不信になった従者

鉄雄とほむらは山中を歩いていく。

「・・・ここは、北養の山中だな」

「あら、来たこと・・・あつたわね、そういえば」

鉄雄は大学生時代に北養の山中を散策したことがある。

当時からのこの地区は自然を称えていた。

東西対立の中ではどちらかという中立でもある。

だから、よく立ち寄っていたのかもしれない。

南風？あそこは危険地帯だ。今はどうだか知らないが。

「たまに世捨て人が住んでいることがあるんだよ、これが」

「へえ・・・あんな感じに？」

ほむらの指差した先では青年がテントに逃げ込んでいた。

「そうだな・・・可哀想に、ありや重度の人間不信だぞ。」

1970年代じゃ珍しくもなかったな。内ゲバとかあつたし。

かくいう俺も殺されるくらいの学生紛争だったんだぞ。

多分、俺が最初の死者だな。調べてないから知らんけど」

「そうなのね……光の種が蒔かれても人間不信はどうにもならないのかしら？」

ほむらの言葉を聞いた青年は、ゆっくりとテントから出てきた。

「お、お前……光の種をどうして知っているんだ？」

鉄雄は目の前の青年が関係者だと察した。

「俺は里見優心から失敗した後のことを任されたんだ。」

田中铁雄だ。あいつから聞かされていなかったのか？」

「……あの方が親友と呼んでいた者なのか？」

「そうそう、俺たちは親友だったんだ」

あの方、という呼び方から優心は青年から慕われていたのだろう。

少し安心したようだが、それでも怯えが残っていた。

よほど、酷い目に遭ったのだろう。

「……敵は何だ？」

鉄雄は率直に聞くことにした。

青年を酷い目に遭わせたのが敵に違いない。

そして、その敵が優心の理想を撃ち砕いたのだ。

「神浜だ」

よくよく考えてみたら、人間不信は何もかも信じられない状態を指すともいえる。いくらなんでも神浜全部が敵とか無理にもほどがある。

「・・・聞き方を変えよう。一番の敵は何だ？」

「和泉十七夜、八雲みたま・・・その二人には気をつける。裏切者だ！」

そいつらが、あの方の計画を打ち砕いたんだ。

あの方の計画は二人のためでもあったというのに・・・！

もういいか？あの方の後継者とはいえ、今は放つて欲しい・・・」

「・・・わかった。すまない、平穩を乱してしまつて」

二人はテントを後にした。

「・・・まどかと連絡を取つてみたわ。

やつぱり、二人と同じ名前の魔法少女がいるわ」

「そうか、ありがとう・・・ところで、まどかは大丈夫なのか？」

「あなたも人間不信が伝染したみたいね？」

まどかは応援しているわよ、あなたのことを。

ちゃんと、誰かを信用しないとやっていけないわよ」

「・・・そうだよな。優心も誰かを信用できる人間だった。

アイツの後継者である俺が誰かを信用しないでどうするって話だよな」

「その調子よ」

二人はそのまま歩き続け、ようやく山を抜けることができた。

一方は魔法少女で、一方は転生者ゆえの加護からか、体力は有り余っていた。それでも歩き続けたら腹が減るのは当然だ。

「この近くにウォールナッツという洋食店があつたはずだが……」
「残つてるの？」

「明治から続いているんだ。さすがにしぶとく残つてるだろ。」

万々歳とかいう中華料理屋の無事は保証できんが」

街では放心状態になつている人を何人か見かけた。

おそらく、光の種の影響だろう。

この東西対立のあつた神浜は変わりつつあるに違いない。

彼らはようやく歴史に振り回されず、個として生きるのだから。

「……まあ、個として生きるのもいきなりは大変なんだろうな」

「そういえば、あなたは前世だと何主義者だつたの？」

「しいていえば、自由主義者であり個人主義だつた。」

でも、右も左も自由主義と個人主義なんて大嫌いだったから。

まあ、俺がこうして平然としていられるのも個として生きていたからかもな」

そこで、鉄雄は何かを思ったようだ。

「・・・思えば、あいつらは自分を愛せなかったんだろうな」

「どういふこと？」

「自分を愛することができなかったから、壮大な主張に飛びついたんだ。

労働者と学生による世界革命とか、愛する日本を守るとか・・・。

小さい自分を何とか隠すために、そんなものを使ったんだよ。

まあ、団塊世代はどちらかというところ、オルテガの言う大衆に近かったから。

人間不信という状態はまだマシなんだよ

あれはまだ自分という存在を信じていられている状態だから」

そして、彼は溜息をついて、話を続けた。

「多分、優心は本当に自分も周りも愛することのできる人間だったろうな。

そうじゃなきゃ、光となって世界を包むことなんてできないから」

「・・・それなのに、その愛していた人たちに裏切られたのね」

「・・・愛というのは必ずしも相手が受け入れてくれる感情ではないからな。

時にグロテスクで、何もかもを切り刻むナイフになるから」

二人はウォールナツの前に立ったが、嫌な臭いを感じた。

鉄雄は自分が殺される時に、ほむらは今までの繰り返しで。

人がむごたらしく殺されたときの臭いだった。
ほんのかすかにだが、それが一瞬だけ漂ったのだ。

そして料理少女は泣きながら調理する

その味を知るようになるのは避けられない過程でした。

ウオールナッツの中は普通に綺麗だった。

1970年代の時よりもずっと綺麗になっていた。

それでも、一瞬一瞬、死臭が鼻を突いた。

まあ、オムライスが出されたら、その匂いで覆い隠されたが。

鉄雄の前世よりもずっと進化しているようだった。

「死ぬ前にもう一度は食べてみたかったんだ」

「よかったじゃない。死んだ後に食べることができて」

「冗談じゃねえぞ」

卵のこちらまで溶けるようなやわらかさが絶妙だった。

鶏肉も申し分なく肉汁が溢れ出していた。

これ以上のグルメリポートを作者に求めないでほしい。

とにかく、この絶品オムライスを作ったのは十四歳くらいの少女だった。

彼女の父親はどこかに出かけているのだろうか？

「これは確かに死んだ後でも食べに行きたくなるわね」

「だろ？本当に最高なんだよな」

だが、食べ終わるとまた死臭が鼻を突く。

まるで、この店で誰か人死にが出てしまったかのようだ。

あまり深く詮索はしなくなかった。

別に鉄雄は正義の味方というわけではない。

ただ、光となった親友チョコレートとの約束のために動いているだけだ。

できるものなら、死体など見たくはないのだ。

絶品オムライスを食べたというのに。それに、ここは思い出深い場所だ。

「・・・まどかだつたら見逃さないでしょうね」

「アイツだつたらな。でも、俺だつたら見逃すぞ。」

というか、ここには女の子一人だけだつたじゃないか」

「・・・あの子、魔法少女だけど？」

まどかからもらったデータによると胡桃まなかというそうよ」

「へいへい、一般人の俺にはわかりませんよーだ」

それと同時に、まなかは魔法少女姿に変身した。

鉄雄も刀の柄に手をかけた。

「……あまり、見た目が変わってないようにも見えたが。」

「……どうして気づいたんですか？」

「そりや嫌な臭いがするし……ゲバ棒でぐちやぐちやにされたことあるからな」

「そうね、まどかが串刺しになったときとかによく嗅いだ臭いね」

「あなたたちが常人離れした体験をしたことはよくわかりました」

だが、鉄雄に戦う気はなかった。

「……俺たちも別の目的があるからな。」

「ちゃんとオムライスの代金は払うから、見逃してくれねえか？」

料理店が嫌うのは食い逃げだ。

よく当時の大学生が食い逃げをしていたが、末路は言うまでもない。

「駄目です。まなかはもうお腹が減ってるんですから。」

「お金なんて何の足しにもならないんです。早く料理させろです」

鉄雄は一瞬、まなかの言うことが理解できなかつた。

だが、だんだんと意味が飲み込めてきた。

「……うわあ、がたがたがたがた」

「ふざけてる場合じゃないわよ」

「そうですよ、ふざけないでくださいよ。

まなかが一生懸命調合した睡眠薬がどうして平気なんですか？

そっちの魔法少女に効かなさそうなのはわかってましたが」

鉄雄はぞつとした。まなかは何としてでもこちらを食おうとしているのだ。

「こちとら催涙弾を巻き添えで何度も食らってるんだ。

今更、睡眠薬なんぞ平気なんだよ。

・・・なあ、本当に見逃してくんねえか？

こっちは親友チヨルチンとの約束があんだよ」

「チヨルなんとかの約束が何だか知りませんが、こっちは腹ペコなんです！」

「他の肉食べりやいいじゃねえか」

「・・・駄目なんですよ。まなかはもう他の食べ物だとお腹を満たせないんです。

あの一週間以来、いくら食べても空腹のままだったんです」

あの不安定な光の種は色々な弊害を生んでしまったようだ。

ここで、少し話を脱線させよう。

あの一週間から、自殺者の数は変わらなかった。

しかし、その割合が変わったのだ。

いじめの被害者よりも、いじめの加害者の方が自殺するようになった。

光の種を植えられてから、自らの闇に直面することが多くなったのが原因と思われる。

いじめをしようとした瞬間には自らの醜悪さを思い知るシステムができてしまった。

おかげで、いじめの数は減ったというのに、自殺者の数は変わらなかった。

弊害がとにかく生まれてしまったのだ。

「そんな時、先輩が・・・先輩が化け物に変わってしまったんです」

「化け物？ 魔女化のことか・・・それはご愁傷さままで」

「いえ、魔女ですらありませんでした。というか、神浜ではもう魔女化なんて起こりません」

「・・・そうなの？」

「そうみたいだね、まどかもそう言ってるわ」

ほむらは基本的にSNSでまどかから情報を得ている。

頼りになるのはわかるが、食事中にいじるのは勘弁してもらいたかった。

昭和人としては、どうしても食事中に別のことをするのは耐えられないのだ。

それはそうと、魔女化が起こらなくなるとは初耳だった。

「もう魔女化が起こらないはずなのに・・・思えば、先輩の様子はおかしかったです。

やけ食いしに来るのはいつものことだったんですが、表情が怖かったです。

「そしたら・・・先輩は、先輩は・・・」

まなかは口を押えて、吐くのをこらえた。

「優心の言う通りだ。不安定な光の種のせいだ、人間性を失う者が現れてしまった。」

「・・・もしかして、その先輩を食ったのか？」

「・・・はい。その時、まなかもすごくお腹が空いて死にそうだったので。」

「その時の先輩の味は決して忘れられません。そして、お父さんの味も・・・」

「・・・さっきのオムライスにも入れたのか？」

「いえ、それはさすがにやっていません。入れたのは睡眠薬だけです」

「料理人としての矜持はまだ残っているようだった。」

「いや、睡眠薬を入れた時点で少し怪しいが。」

「まなかのやったことが悪い事だってもちろんわかっています。」

「これは誰かの責任ではなくて、まなか自身の責任なんです。」

「この罪は、まなかだけで背負うつもりなんですから・・・！」

すると、彼女の服、武器と思われるフライパンが光を放ち始めた。

次の瞬間、彼女は多数のプロパンを背負って、周りには何十個もの椅子が浮かんでいった。

フライパンは金色に輝く炎を纏っていた。

だが、彼女自身は人間としての姿を保っていた。こんなのは優心から聞いていなかった。

「……すいません、お客さんにこんなことをするのは悪いことだつてわかっています。

この罪はまなかだけで背負います。だから、どうか料理になつてください」

まなかは涙を流しながら鉄雄たちに攻撃を始める。

鉄雄は刀を取り出し、自分に向かつてきた攻撃を全て弾く。

刀が勝手に鉄雄の体を動かしてくれていた。

ほむらは時間停止で全ての攻撃を避けていた。

「……ねえ、この子からも光の種は取れるんじゃない?」

「そうかもな……ううつ、殺人か。」

やられる方にはたまつたもんじやないつて知つてたけど、

今回の人生ではやる側に回ることになるのか……」

「あなた以外の転生者は無慈悲にやつてたけどね」

二対一だ。しかし、勝てる気がどういふわけかしなかつた。

これが光の種の力を引き出した結果なのだろうか?

い。どうやら、人によって人間性を失うか新しい力を引き出せるかどうかが変わるらしい。

とにかく、今の二人にとっては強敵だ。
「あら、どうやらお困りのようね？」

戦う乙女

二人の前にゴシック的な服装を纏った少女が立っていた。彼女の周りには七つの発光する物体が舞っていた。

「・・・邪魔するんでしたら、料理にしますよ?」

「あら、これが本当の謝肉祭カーニバルですね」

まなかは少女に向かって炎を纏った攻撃を放つ。

「・・・スイドリーム」

緑色に光っていた物体が如雨露に変わる。

彼女はその如雨露から水を出して攻撃を無効化した。

「・・・美しい戦い方だな」

鉄雄は感嘆の溜息をついた。

「これが乙女の戦い方よ」

少女はそう言って、次の攻撃に移った。

彼女の背中に巨大な漆黒の翼が生成された。

そして、彼女はその翼の羽根をまなかに飛ばした。

ガトリング砲のごとき攻撃が展開される。

まなかはフライパンでそれら全てを弾いたのだが。

それでも、頬にかすり傷は付いた。

「・・・あなた、とつても美味しそうですね」

「それが乙女に対する感想？まあ、悪い気はしないわね」

「・・・話に割り込むようですまんが、アンタは誰なんだ？」

「そうね・・・明利華宵、究極の乙女を^{Maiden}目指す乙女。」

言っておくけど、魔法少女じゃないわよ。そこは覚えておいて」

ほむらはたいして驚きはしなかったが、まなかは違った。

「ま、魔法少女じゃないって・・・嘘にも程がありますよ！

そんな戦い方、魔法少女じゃないと無理なはずです！」

「世の中には不思議が溢れているものよ、まなかさん。

可哀想だけど、死んでもらうわ。あなたの内に宿る光を貫うためにね」

「な、何を言ってる・・・」

その瞬間、彼女の胴体は横に切断されていた。

「これがレンピカの威力・・・我ながら恐ろしいわ」

まなかの口からは血が溢れ出た。

「……ま、まなかの血、おい……し……
つむぎさんにも……飲んで……もら……」

私たちは生きて行くことができました。ずっと食べ続けることができました。

まなかは息絶えてしまった。

そして、彼女の体から光の種が少しづつ出てきた。

「……俺たち、出る幕なかつたな」

「そうね……これが本当の転生者の力よ、鉄雄。

今までの時間軸でどれほど死者が出たことか……」

「あら、私は下手に殺しなんてしないわよ。今のようなことがない限りは。

ところで……この光の種、いるかしら？」

「もちろん……つて言いたいけど、今の戦いはアンタがMVPなんだぞ。

それに、あまり人間から得るのは気分のいいものじゃないからな……」

鉄雄がそう言うと、華宵は光の種を遠慮なく吸収した。

「ふう、これでまたアリスに近づいたわ。ありがとねー」

彼女は店の外に出て、そのまま飛んで消えていった。

「・・・とにかく、逃げるぞ」

「わかったわ。私の時間停止を使いましょう」

気がつくつと、鉄雄はある古書店の前に立っていた。

看板を見ると、夏目古書店とある。

新築したのか見た目が新しくなっていたが、優しい雰囲気は変わっていないかった。

さつきまでの殺伐とした雰囲気は嘘のようだった。

「ここにはまどかと友達魔法少女がいるの。」

こつちの目的を隠して接近すれば、いい情報源になるはずよ」

「それはいいな。騙すのは気が引けるけど・・・」

「あら、また会ったわね」

「なんでや」

「この店の雰囲気が好きだからに決まってるじゃない」

三人は古書店に入った。

すると、店のカウンターに立っていた少女が笑顔で出迎えてくれた。

「あつ、華宵さん！華宵さんの欲しかった本が手に入りましたよ！」

「あら、ありがとう！華氏451度、読んでみたかったのよね」

鉄雄は華宵に一種のシンパシーを感じた。

彼自身もよくSFを生前読んでいたからだ。

アジ演説だって、SFを参考にしたことだつてある。

まあ、その演説の所為で殺されたわけなのだが。

「・・・あなたが夏目かこね。私は暁美ほむらよ。

まどかから話は聞いていると思うけれど・・・」

「神戸市で魔女化が起こらない現象について調べに来たんですよね。

まどかさんからほむらさんのことは色々と聞きましたから」

なるほど、と鉄雄は思った。

既に目的の偽装は済んでいたのだ。

「あら？あなたたち、光の種が目的じゃ・・・ちよつと、どこ連れて行くのよ！」

「かこさん、離れてくださいな。ちよいつと、血を見ることになるので」

「そうよ、あなたが気にすることではないから」

「い、いやーっ！」

鉄雄は華宵を古書店裏に引きずっていった。

「I m e g u d a i s u k i i !」

華宵の悲鳴なのか英語なのかよくわからない叫び声が響いた。

返り血を浴びた鉄雄とほむらが店内に戻ってきた。

「話を続けましょう、かこ」

「・・・その、言いにくい事ですが」

「何よっ？」

「まどかさんがこっそりほむらさんたちの本当の目的を私に教えてくれていたんです」

二人は膝から崩れ落ちた。

そうなのだ、まどかはそういう人間なのだ。

善良なのは間違いないのだが、ちよつとお節介が過ぎる点があるのだ。

「ティヒヒ、かこちゃんが入手くサポートしてくれるはずだよねっ！」

もう一つの拠点の存在？

とりあえず、気を取り直して情報を仕入れることにした。

まず、神浜の事情を知らないかどうかにもならない。

「・・・あの光の種は魔法少女たちの間だとどういう認識なんだ？」

それによって、鉄雄たちの行動がどう制約されるかわわってくる。

もし、魔法少女全員が光の種を邪悪だと認識していたらこつそりと行動だ。

北養の山中で会った従者の様子からして、何人かは敵に違いない。

「・・・ワルプルギスの夜という魔女に対する最終兵器。」

皆、そう思っています。私もまだかさんから教えてもらうまでそう思っていました」

事実、ワルプルギスの夜はあの光で大幅に弱体化しましたから・・・」

「いくら何でも、全世界巻き込むような兵器使うか、普通？」

そこで、ほむらはある二人の魔法少女の存在を思い出した。

「そう言ったのって・・・和泉十七夜か八雲みたまとかいう魔法少女かしら？」

「はい、そうです・・・」

とりあえず、従者の言うことは本当なのかもしれない。

二人の魔法少女は優心の本当の目的を隠したのだ。
治療ではなく、兵器という目的にすり替えてしまったのだ。

「・・・二人に何か変わったところはあるのか？」

「以前よりも魔力が強くなった感じはしましたが・・・」

鉄雄は拳を鳴らし始めた。

「ちよつと待っていてくれ、ほむら」

ほむらは溜息を吐いて言った。

「待ちなさい、殴るなら正当な理由が必要よ。」

というか、今は二十一世紀だから女性の顔を殴ること自体がNGなの。

あなたが凶行に走った途端に、あなたは女性の敵間違いなしね」

「・・・わかつちやいるよ。」

でも、私欲のために親友の願いを打ち砕いたんだ。
チヨルチン

・・・わかつてる。殴るのは、二人が誰からも敵と認識された後だ」

「わかつてくれたようで何よりだわ」

華宵も見ても無残な状態で帰ってきた。

「・・・痛いわ」

「そーいや、アレはOKだったのか？」

「女性と一緒に殴るなら批判はそこまでされないわ、多分」

「それはそれでリンチとして炎上するわよ、アンタら」

かこはあまり事態を上手く飲み込めていないようだった。

当たり前だろう。鉄雄も本当なら彼女と同じことになっていたかもしれないから。

「あ、あの・・・私に何か手伝えることはありますか・・・！」

「ある・・・と言いたいところだが、かこさんはゆっくりしていてくれ。

これは俺たちのある意味俺たちの問題だからな。

もしかすると、俺たちのせいにかこさんも孤立してしまうかもしれないから。

まあ、たまにSNSで情報提供してくれたら嬉しいかな」

「あつ、ありがとうございますー！」

「いやいや、お礼を言うのは俺たちだって・・・」

そこで、あることを思い出した。

「そういや・・・光の中心地って具体的にどこだったんだ？」

「あつ、中央区の方でした。あそこは今、壊滅していますが・・・。

さらに言えば、光の木が生えていた場所もわかっているんです」

かこはSNSを通して、地図を送ってくれた。

確かに中央区の方にある。駅からは少し遠い場所だ。

「ななかさんが行つてみたようですが、壁にこんなのが書かれていたんです」
今度がかこが彼女自身のスマホで見せてくれた。

完全に黒い紋様が記された真つ白な部屋の壁面に英語が書かれていた。

Face the Fear, Build the Future

恐怖に直面し、未来を創造せよ。いかにも優心の信念らしい言葉だ。

あと二つの文章に関しては意図が不明だった。

Here is at Stars' End

これはいったいどういうことなのか数秒間は理解できなかった。

だが、優心はこれを通して何か伝えたかったに違いない。

必死に記憶を総動員して、ようやく一つの可能性に辿り着いた。

「・・・こんなこともあるのかと、つていうことか」

「ええ、神戸市の端つこのどこかにターミナスがあるわね」

「ええ、私もななかさんにその可能性は伝えました」

三人の会話に、ほむらは完全に置いてきぼりであった。

それもそのはず、彼女はSFを読んだことがなかったのだから。

鉄雄はSF全盛期、華宵は乙女の嗜み、かこは本好き。

あのロボット三原則を生み出した作家の小説を読んだことがあるのは当然だ。

「・・・わけがわからないわ」

少なくとも、この夏目書房以外に、もう一つの拠点候補が見つかったのだ。

そこで、優心の理想を復活させることができるかもしれないのだ。

問題は、それがどこにあるのかわからないということである。

ただ、それだけが強大な壁として立ちはだかっていた。

「ところで、なんだよターミナスって。テルミナスだろ？」

「私はハヤカワの方を読んでいるから・・・」

「私は両方とも読みましたよ」

「あなたたち、一般人を置いていかないで」

ネジレ探偵

夜の神浜市は魔法少女と魔女の街・・・ではなくなつた。

もともと、転生者がいるのは当たり前だが、新しい要素が加わつた。

ねじれと、その内に宿る光の種を求める者たちだ。

「・・・うぐつ、ひでー見た目だな」

「吐かないでよ。音でバレるから」

「アンタたち、喋つてる時点で手遅れよ」

鉄雄、ほむら、華宵の三人は化物を狩ることに徹した。

拠点搜索は華宵の人工妖精であるホーリエが担当してくれている。

路地裏には眼球で構成されただけの人間が突っ立っていた。

「・・・見てると呪われそうだな」

「邪眼という奴ね。アレはまだ生まれたばかりだから大丈夫よ」

「知ってるの、華宵？」

「私の前世に存在した都市伝説みたいなものよ」

精神の強いほむらが時間を止めて、弾丸をぶつ放す。

さすがに、化物はそれだけでは死なない。

だが、相手の目は血で封じられることになった。

そこから転生者二人がめつた刺しにするのだ。

「やっぱりメイメイも使い勝手がいいわね。」

アンタもなかなかいい刀を使ってるじゃない」

「勝手に体を動かしてくれるからな」

化物だった何かから神々しく光る種が出てきた。

半分をほむらの盾に收容し、もう半分は華宵が吸収した。

「そーいや、どうして華宵は光の種を集めてるんだ？」

「・・・失望すると思うけど、結局、私も私欲で集めてるわ。」

究極の乙女という存在を完成させうる代物だもん。

ムカついたなら、殴っていいわ」

「いや、さすがに殴る気はしないよ。」

別に悪意があつてやつてるわけじゃないんだろ？

それに、自分だけのことしか考えてなかつたら、俺たちに協力しないだろうし」

三人はその場を急いで離れた。

見つかると色々ややこしいし、それが魔法少女だったらなおさらだ。

ある程度離れたところで、話を再開する。

「まあ、皆が究極になれるんだったら、私はそっちを選ぶわ。

一人だけお先にゴールだなんて少し性格悪い真似もあまりしたくないから。

・・・それにしても、さっきの化物はどうしてあんなことになったのかしら？」

「多分、周りの視線を過度に気にして生きてきた手合いだな。

俺の生きていた1970年代だとあまりなかったことなんだけども。

これから、あんな化物になるのがどんどん増えてくるぞ、多分」

そして、三人は次の光の種を求めに行った。



三人が化物と呼んでいた存在。

それは魔法少女たちの間では「ネジレ」と呼ばれていた。

一般人でさえも魔女のような存在となるネジレ現象。

その原因はわかりきるほどわかりきっていた。

どう考えても、あの一週間だ。

白夜、黒昼と呼ばれるあの一週間を境にネジレ始めたからだ。

誰もが和泉十七夜を非難したかった。

何故なら、あの光の木は彼女とある一般人が作った兵器だと彼女自身が言ったからだ。

でも、それは無理な話だ。彼女の魔力は急に強くなった。

下手に文句を言おうものなら・・・そういうことだ。

「・・・ねえ、れんちゃん」

「なんですか・・・？」

「二人で挑んだら、アレに勝てるかな？」

「・・・無理だとおもいます、はい」

「だよー・・・はあ」

綾野梨花と五十鈴れんはネジレを探していた。

ここ最近、魔法の弱体化が著しい。

このままでは、魔法の絶滅は確実だろう。

何しろ、ソウルジェムの濁りさえ格段に遅くなったのだから。

それも十七夜に文句を言えない理由だった。

しかし、濁りは確実に増えていく。

そこで注目されたのが、倒したネジレから出てくる光だ。

魔法少女たちは“ライト”と呼んでいるのだが。

とにかく、それを使えば濁りを中和してくれるのだ。

しかも、ライトはグリーンフシードと違い、中和したら消えるので魔女が増える心配もない。

さらにライトを余分に吸収すれば、魔力もどういふわけが増えてくれる。

そんなわけで、魔法少女たちはネジレを探すようになった。

ネジレは人間が元だ。しかし、倒さねば彼女たちの生存も危うい。

「……待ってください！」

「あれは……一般人がネジレと戦ってる？」

一般人とわかったのは、それが男子だったからだ。

彼は日本刀でネジレに対して有利に戦っていたのだ。

そんな彼をさらに有利にしているのが、二人の少女の支援だ。

一方は魔力から魔法少女だとわかったが、もう一方はまた別の存在のようだ。

三人は魔法少女でも苦戦するネジレに対し、あっさり勝利を収めた。

そして、彼らは光の種を回収した。いや、一人は吸収したと言った方が正しいだろうか？

この目撃談は、やがて神浜市の魔法少女全体に伝わっていった。

誰がいつそう呼び始めたのか？

この三人にはネジレ探偵という呼び名が付けられることになった。

優心の家に向かつて

「見つからないって・・・端っこになかったのかしら？」

まあいいわ。ゆつくり休みなさい」

ホーリエは神浜の端という端を探したが、ついに優心のもう一つの拠点は見つからなかった。

だが、ある物を見つけたらしく、ふるふると震えた。

人工妖精と意思疎通ができるのは華宵だけなので、鉄雄には震えているようにしか見えないが。

「えっ、優心の住んでいた場所を見つけたって？どこ？」

・・・里見メデイカルセンター？あつ」

よくよく考えてみれば、優心の苗字は里見だ。

それに神浜市に住んでいた。何か関係はあつて当然のはずだった。

「・・・親友チヨルチンの日記や手記から、何かわかるかもな。

まあ、アイツが書いていればの話なんだけどな」

それに対して、かこは難色を示した。

「それは少し危険だと思います。」

里見灯花という子がいるんですが、その子も魔法少女なんです。

その子はその子で、光の木とは別に災害を起こしたので監視中で、

もし鉄雄さんたちが行くこうものなら・・・」

「相手の懐に飛び込む、ということになるか」

鉄雄はテキパキと本を整頓しながら言った。

彼は住み込みでバイトをすることになったのだ。

都会というのは、とにかくにもお金がかかるのだから。

おそらく、光の種を完全に蒔いても、経済システムは変わらないだろう。

「まあ、優心の友達と言えばある程度は通してもらえらるだろう。」

嘘じゃないもんな。それに、ただの友人である一般人に何かするとは思えんし」

「それなら、私と一緒にいった方がいいと思います。」

ほむらさんは店番をお願いします。華宵さんは何もしないでください」

「私が何したっていうのよ！」

「本の上に紅茶を溢したこと、まだ忘れませんか」

「それ一年前のことじゃない！」

「そもそも、鉄雄さんたちのこと噂になってるんです。」

ネジレを狩る三人組・・・ネジレ探偵って。

三人組で行動したら、怪しまれるに決まってるじゃないですか」

この時から、鉄雄たちは化物のことをネジレと呼ぶようになった。

なんとなく響きがよかったからである。

「その点、かこさんは魔法少女だから一緒にいれば怪しまれない、と」

「そういうことです。あと、普通に日本語で親友しんゆうと言ってください。

変な感じに怪しまれるので。皆が皆、鉄雄さんみたいに韓国語を知ってるわけじゃあ

りません」

「へーいっと」

こうして二人で里見メデイカルセンターまで向かうことになった。

街は多少荒れてるが、いずれ復興するだろう。というか、復興の真っ最中だ。

作業員が生気の抜けたような顔をしているのが気になるが。

これもまた、光の種の影響であろう。

「一歩違っていたら、見滝原もこうなっていたのかもな」

「でも、皆が力を合わせたおかげで倒すことができました。

それに、優心さんの光の木も・・・本人はそのつもりではなかったかもしれませんが」

「でも、アイツのことだから喜んでそうだな」

優心は今、どこにでもいるのだ。鉄雄の心にも、かこの心にも。

すれ違う人々の間にも、全人類の心の中にいるのだ。

駅に着いて、改札を出て、新西区行きの地下鉄に乗る。

参京区から、水名区に入っただろうか？

あの時代だと、水名区の伝統は悪だと言わんばかりに軽視されていたのだが。

今の時代ではいったいどうなっているのだろうか？

「・・・昔よりかはマシになったのかな？」

「昔の水名区と比べてですか？」

かここにもある程度事情は話しておいた。

話さざるをえなかった、ということもあるのだが。

「昔はもつと新しくとかかって水名区も躍起だったんだけどな。」

古い煉瓦の建物の隣に、不似合いなファストフード店もあつたぐらいだぞ」

「それはそれで面白そうですね」

「俺も見た時は大爆笑してたよ・・・」

地下鉄なので風景は見えない。

「そうだ、帰りはゆつくりと見て歩こうか？」

光の・・・げふんげふん、あれはほむらから一つもらったし」

「はい、大丈夫ですよ。時間はありますし。」

でも、ほむらさんはいいんですか？華宵さんはどっかに行くからいいとしても」

「あれが真面目に店番をしていると思うか？」

「えっ？」

鉄雄の言うことは半分外れていた。

つまり、半分は当たっていた。

何故なら、彼女は仕事と同時にエロゲーをしていたからだ。

それはコイカツのようなゲームである。ちなみに、店のパソコンで。

ほむらはそれでまどかそっくりのキャラクターを作ってプレイしていた。

キリつとした表情で仕事をしながら、鼻血も流していた。

「うふふ、まどかはやっぱり可愛いわね」

鉄雄は彼女が転校してからの付き合いなので、よくわかるのだ。

「……とにかく、あれは問題ないってことだ」

「……」

新西区に着くと、そこは近代的な街並みが広がっていた。

鉄雄の1970年代の予想だと未来は白いコンクリートで構成された世界だった。

だが、現実の未来はそこまで極端にはなっていないが、違和感はなかった。

「本心を言えば、新西区に行くのは嫌だった。鉄雄の死んだ場所に近いから。そんなことを思っていると、かこがぎゅつと手を握ってくれた。」

「体、震えていましたよ・・・安心してください。もうあの時代じゃないんです」

「・・・わかってるよ、今はあの頃とは違うって。」

でも、それはそれで、これはこれだ。トラウマは簡単には払拭できない」

「・・・」

そのころ、ほむらは鼻血を流しながら（ゲーム内の）まどかの手をぎゅつと握っていた。

「うふふ、まどかは本当に可愛いわね」

「かこさん、いますか？」

常盤ななかが入ってきたので、ほむらは（ゲームの方で）時間停止した。

「いらつしやいませ・・・ゆっくりしてって」

「まず、その鼻血を拭きなさい」

手記

トラウマに耐えながら里見メデイカルセンターに辿り着いた。帰りも新西区を通ることになるのだが、しようがない。

なぜなら、センター自体が新西区内になるのだから。

「うっ。ふ。．．．」

「耐えてください、鉄雄さん！」

ともかくにも、二人は院内に入った。

そして、里見灯花を探すことにした。

彼女に口利きしてもらえば、優心の部屋に入れるかもしれない。

そうでなくても、彼の遺物である手帳とかを見れるだろう。

「それで、どんな見た目をしてるんだ？」

「あつ、あの子です」

いかにもお嬢様っぽいような、わがままっぽいような．．．

そんな見た目の美しい少女であった。

知性が溢れ出ているオーラも感じ取れた。

まさにあれが天才という人種なのであろう。

かこはさつそくその少女に話しかけた。

そして、訪れた理由を説明してくれた。

「……ふーん、兄さまの親友？」

灯花は鉄雄を睨んだ。

その表情だけで、鉄雄は色々と察してしまった。

彼女が兄である優心のことが大嫌いであつたということ。

いや、大嫌いではすまないだろう。“憎悪”が正しいに違いない。

「……ああ、アイツの親友だつた。」

アイツが二年前、見滝原に来た時にすごく意気統合してな。

最近、胸騒ぎがしたから神浜に来たんだけど……」

「……じゃあ、あなたが兄さまに会つた最後の人なんだね」

あの光の木が現れるまでの二年間、どうやら行方不明だつたらしい。

その二年間でさえも、彼女の憎悪を癒すことはできなかったようだが。

「人類のびよーきを治すとか、そんなわけわかんないこと言つてたよね？」

「……言つてたけどさあ」

完全に言葉遣いが喧嘩腰のそのものだつた。

いや、子供だからそういった態度をわきまえていないだけなのかもしれない。「症状の説明も無いし、そもそもエビデンスだつてないし、

おくすりを作つたと言つても、その臨床試験すらしてないんだよ？

それなのに、みーんな兄さまの言うことをほいほいと信じて……。

あなたもそういつた感じなんですよ？」

「……」

じっくり考えてみると、確かに彼女の言う通りだ。

優心は人類の病気を治すと言つたが、具体的な症状は曖昧過ぎる。

人類が急に病気になつたというエビデンスもない。

治療薬は光の種だが……ちゃんとしたものだったか怪しい。

いや、中途半端な光の種はネジレを生むというのはわかつていたようだが。

「……アイツは科学者というよりかは、むしろ詩人だった。

だから、理性よりかはロマン的な魂でことを進めようとしたんだらうな」

「……そんな感じに、みーんな、お兄様を擁護したんだけど」

灯花の目には涙が溜まってきていた。

「わたくしと宇宙についてお話をした学者さんたちだつてそうだった。

兄さまはまったくもってエビデンスを提示しなかつたのに、

あいつらは兄さまの考えに賛同した。

びよーきというのがものすつごく曖昧なのに、みんなびよーきを治そうって口を揃えた。

お父様はあまり兄さまのことに口出ししなかったけど、絶対、応援してたと思う。普段は科学的であれとかなんとか言ってるくせに、兄さまだけには甘かったもん」
鉄雄はさらに察することができた。

これはあれだ。兄と比べてとか弟と比べてみたいなそんな感じだ。

彼女は出来の悪い兄を憎んでいたのではない。

科学者として頑張っている自分よりも評価される詩人を憎んでいたのだ。

「……みんな、兄さまの方を褒めてた。

あんなの、言うことは立派なだけの人間なのに」

「……」

鉄雄は少しムカついた。しかし、それを口に言うのはやめておいた。

これ以上は聞くのも嫌だったので、本題に入ることにした。

「……この前、光が全世界に降り注いでいた。

それを浴びて、俺は優心のことを思い出したんだ。

優心の日記とかに何か手がかりがあるんじゃないかって思ったんだ」

「兄さまの手記は全てハングルだったけど？」

「問題ない。俺はハングルが読める」

あの本の原詩を読むために勉強したのだ。

もともと前世で韓国語を習っていたのも大きかったが。

こうして、彼女に優心の部屋まで案内してもらった。

そこは何だか寂しい部屋だった。

数々の文献と瓶があるのに、何か重要なピースが欠けていた。

そう、部屋の主が不在だからだ。

「……へえ、意外と兄さま、文献とか読んでたんだ」

机の上に、手記は置いてあった。

最初の一页に書いてあったのは、あの本の序詩だった。

もちろん、ハングルで書かれていた。

死ぬ日まで天を仰ぎ

一点の恥じ入ることもないことを、

葉あいにおきる風にさえ

私は思い煩った。

星を歌う心で

すべての絶え入るものをいとおしまねば

そして私に与えられた道を

歩いていかねば。

今夜も星が 風にかすれて泣いている。

あの詩集はまさに彼の心を体現するにはぴったりだった。

鉄雄は適当にページをめくってみた。

僕の計画には完全な失敗は許されない。

愛しい灯花が、人間でなくなるのは耐えられない。

中途半端な失敗は・・・まだ彼女が人間でいられるかもしれないだけのこと。

一番いいのは完全な成功だ。

あの子は、間違いなくE・G・Oを引き出せるだろうから。

僕の計画にAngelaはいない。それだけで成功は間違いなしだ。

どうか、あの子の前に幸せな風景が広がりますように

優心は妹のことを愛していたようだ。

E. G. O というのは何なのか？ おそらく、ネジレとは違う何かなのか？

Angel a というのは・・・よくわからない。

「くふふ、そういうえば兄さまってたまに論理的に研究することはあつたんだつた」
灯花は棚から緑色の液体が入った瓶を取り出した。

「これ、エンケファリンっていう物質なんだ。脳内麻薬ともいうけど。

それだけを上手く抽出することに成功してたの。

まあ、エネルギー開発とか論理的じゃないことを言つてたけど」

どうやら、彼はちやんと科学的なこともやっていたようだ。

まあ、そうでなければ光の種を生むことは難しかっただろうが。

また適当にページをめくる。

予想に反して、みたまさんは僕の計画に好意的だった。

確かにあの日、僕が十七夜さんと一緒に彼女を庇つたのはプラスに働いたに違いない。

それでも、彼女が憎む神浜を救うという計画に賛同するとは思えなかった。

でも、彼女は喜んで協力を賛同してくれたのだ。

彼女が師匠と呼ぶ人からたくさんのグリーンフィードを手に入れることができた。

これで幻想体を用意することができそうだ。本当に嬉しい。

みたま・・・八雲みたまのことだろう。

しかし、神浜を憎んでいたとは知らなかった。

おそらく、東西対立で心が傷ついてしまったのであろう。

だが、そんな彼女がどうして優心を裏切ったのか？

少し前のページをめくってみる。

十七夜さんは最初は僕の計画に難色を示していた。

彼女の気持ちはよくわかる。

これは人によっては一種の洗脳とも捉えられるからだ。

でも、僕は彼女に必死に説明した。

ここで人間精神に光を与えないと、未来は悲惨になると。

現に、神浜市民は歴史に振り回されてばかりで個を失っているではないかと。

・・・なんとかして、彼女の同意を得られた。

彼女だって、神浜を愛しているんだ。

でも、わざわざ破壊する必要はない。僕の計画に従えば、壊す必要はないんだ。

和泉十七夜も協力していたらしい。すると、どういうことだ？

彼女たちは最初は優心に協力していたそうじゃないか。

でも、裏切った。一方は神浜を憎み、その破壊を願っていたに違いない。

もう一方は神浜を愛しているがゆえに、破壊しようとした。

「くふふ、何かわかったかによー？」

「・・・いくつかわかったが、一番言いたいのは、優心はお前を愛していたということだ」

途端に、彼女の表情が冷やややかなものとなった。

「ふーん・・・二年も放っておいて？」

「まあ、そこは言ってやるな。アイツだって、忙しかったんだ」

「その忙しさの結果が、このザマでしょ？」

彼女の口調には確かな怒りが感じられた。

「無責任に薬をばらまいて、どうなったと思う？」

今、世界中の偉い人が困ってるんだよ？

偉い人だけじゃないよ、皆が困ってるんだよ！

兄さまがばらまいた薬のせいで、ネジレちやうことになったんだから！

それなのに、どうしてあなたは兄さまの味方なの？」

「・・・俺はアイツがこんな中途半端な真似をするとは思えないんだ。

光で包んだ後に、どうしてわざわざ暗闇を用意する必要があるんだ？

そんな上げて落とすような真似は優心だったらしないはずだ」

「・・・むう、確かに。兄さまはすつごく人が良かったし」

「なあ、灯花。アイツがよく立ち寄っていた場所とか知らないか？

そこにだったら、現状を打破できるものがあるはずなんだよ」

「・・・悪いけど、わたくしも知らないにゃ」

しばらく気まずい空気が流れて、灯花は逃げるように部屋から出て行った。

「・・・とにかく、この手記はちよつと借りるとするか」

「・・・そうしましょう」

水名見物

新西区をまた通るのは少し辛かった。

だが、さつきよりはマシになっていた。

鉄雄とかこは電車に乗って水名大橋を渡った。

見えてきた水名区は1970年代よりはマシに思えた。

あの時代特有の軽薄さはなくなっていたのだから。

でも、どこか伝統に固執している気概も見られた。

「・・・まあ、これはこれでいいのか？」

「何か水名区に思い出でもあつたんですか？」

「・・・恥ずかしい話だが、学生紛争つてのはファッションも兼ねてたんだ。

お嬢様たちに良いカツコ見せようとあそこでデモもしてたな」

「鉄雄さんもそれに参加してたんですか？」

「いや、俺は見物を兼ねて散歩してた。

まあ、親しくていていた人はたくさんいたんだけどさ。

会っても、お互いわかんないだろうなあ・・・」

俺はこんな姿だし、あっちはあっちで年を取っただろうし」

「……」

駅を出ると、余計に伝統的だと思えてしまった。

瓦屋根や煉瓦造りの建物が以前よりも増えている。

誇りとかに対する執着ともいえる。

「道行く人の何人かが生気抜けてるのは参京区と変わんねえな」

「まあ、全世界がそうなってると思いますよ」

駅から出ると、あるものが目についた。

それは人力車だった。

よっぽど伝統性を前面に押し出したいらしい。

これでは1970年代と根が何も変わってない。

「……とりあえず、歩いていくか」

「それがいいですね」

二人は古き良き街を歩いていく。

水名城跡や美術館を見物していった。

こうしてほっとできるのは神浜に来てから初めてだった。

最近はずれと戦ったりしてばかりだった。

全てが終わったら、もっとほっとできるのであろう。

全ての光が完全に蒔かれた後の世界……。

もちろん、耐え切れずにネジレみたいになる者もいるだろう。

だが、それすら抑制する何かを手に入れる者だつて現れるはずだ。

「はわわ……すごく立派な刀です」

なんか変なのに絡まれてしまったが。

少女は背中に背負った刀に擦り寄ってきた。

「……かこさん、この子は誰だ？」

「刀剣アイドルとして知られる史乃沙優希さんです。魔法少女でもありません」

「あつ、すみません！沙優希、刀を見るとついつい興奮しちゃって……」

「いや、まあ大丈夫だ」

沙優希と別れて、見物を再開する。

それにしても、水名区の女性たちは1970年代よりかは自由なようだ。

まあ、まだ因習は残っているかもしれないが。

工匠区はどうなのだろうか？あそこもまた買い物に行ってみるのもいいかもしれない。
い。

しばらく歩き続けると、今度は行き倒れている少女に出会った。

「……この飽食の時代に行き倒れなんてな。お経は唱えてやるか」

「ぐう……まだ、私、生きていますよ……」

「そうか。かこさん、どつかその辺の喫茶店で休憩を兼ねて、

この子に何か食べさせるとするか」

「は、はい！」

二人は少女を近くの喫茶店まで運んだ。

そこは鉄雄が学生時代（前世）によく足を運んだ喫茶店の一つだった。

その喫茶店の雰囲気は1970年代のままであった。

店主も質の良い料理を早めを持ってきてくれた。

「……なんか、君に似た学生がいたような気がするが」

「気のせいだ、店長さん」

「そうか……やっぱり私もボケ始めたか」

鉄雄は彼のことをよく覚えていた。

1970年代のとき、この喫茶店の店主はアルバイターだったのだから。

アルバイターから店主までよく出世したものだ。

「……すつごくおいしいです！」

なんか、全部市販のもののはずなのに！」

「ま、まあ空腹は最高の調味料だからな。この店、ずっとやり方変えてねえのかよ」
少女はあつという間に完食した。

「ありがとうございます！私、若菜つむぎです！

最近、ずっと断食状態に近くて……」

「ダイエットか？下手なダイエットはD i eにつながるからやめておいたほうがいいぞ」

？

「……違うんです。私が常連だった店が、潰れてしまったんです。

ウオールナッツっていうんですが……」

「……ああ、あの店か」

鉄雄は罪悪感を感じた。

あの日、自分が来なければ、あの少女は生きていられたのではないのか。
そうやって横になって考えることがあるのだから。

早めに逃げたおかげで、犯人が見つからないまま、迷宮入りしそうだが。
それどころか、世間ではむしろまなかの方にバッシングが集まっていた。

冷蔵庫に二人分の人肉が見つかったし、まなか自身もネジレに近かったから。

「……私、どうすればいいのかわからないんです。

まなかさんのしたことは確かに許されないし、私も許さない。

でも、いくらなんでも殺されるのはおかしいです・・・」

だが、あそこで殺していなければ鉄雄たちのほうが殺されていただろう。

それだけじゃない。彼女まで美食にされていたに違いない。

結局、それはそれで、これはこれなのだ。

その後は気まずい沈黙が流れたまま、結局彼女とは別れた。

二人は再び、水名区を歩き続けることになった。

「・・・鉄雄さん」

かこは新西区でしたように鉄雄の手をぎゅつと握ってくれた。

「・・・責めたけりや、責めていいぞ。」

結局、俺も加担したのは確かなんだからな」

「いいえ、私には鉄雄さんを責める資格なんてないです。」

鉄雄さんたちはできることをやっただけなんですから」

「どうやら、心の底からの安息は優心の計画を完成させない限りは許されないようだった。」

二人は夏目書房にそのまま徒歩で帰っていった。

「なるほど、まどかとかこをイチヤイチャさせるのもいいわね！」

「ええ、私も新しい境地に目覚めることができそうです。

ありがとうございます、ほむらさん」

「いいえ、礼を言うのこちらのほうよ。」

最初は私以外の子がまどかと「規制済み」するなんて思ったけど……。

これはこれで捲ることに気づけたわ」

店のカウンターで二人の少女が鼻血を流しながら握手を交わしていた。

そんな二人をかこは魔法少女に変身して空高く吹き飛ばした。

「……しばらく、一人にしてください」

「……」

かこは店の奥に行く。突然の性的関心を向けられた恐怖からか、彼女の泣く声が聞こえた。

鉄雄はやれやれと思いつつ、店のパソコンに入っていたエロゲーのデータを消去した。

かこを決して怒らせてはいけないと思いつつながら。

次の物語へ

新聞の切れ端が風に飛ばされて、風宮朗生の前に落ちた。

その切れ端は見出しの部分だったようだ。

二木市、生物災害により壊滅状態

自衛隊の決死の戦いで鎮圧されたのは電気屋のテレビで知っていた。

あと、市長のとっさの判断で被害は建物だけで済んだ。市民は避難できたのだ。

さすがに二木市ほど酷いことになった事例は見られなかった。

しかし、世界中がこれにより改心に向かっていた。

隣人たちは以前よりも互いのことを気にするようになった。

そして悩んでいるようであつたら、極力寄り添うようにした。

無理に問題の解決を図ろうとはしなかった。余計なことをして生物災害になったら

コトだ。

だから、一緒にいるだけだ。それだけでも孤独を癒せるから。

風宮が久しぶりに訪れた風見野市もずいぶんと人情に溢れていた。

あの一週間以降、人々は他人に積極的に関わることに躊躇しなくなっていた。

少しでも他人を放っていたら、そいつが生物災害になるかもしれないからというものがある。

「・・・なんか昭和みてーだな」

彼は新しくできたという孤児院に向かった。

途中、親切な人々が案内してくれたが、その度にお菓子までくれた。

「杏子、いるかー?」

「はいはいつと・・・確か、お前は・・・朗生だったっけ?」

「そうそう、復讐目的で日本各地を旅してた朗生でーす」

「二年ぶりじゃねえか・・・ようやく終わったんだな」

「終わらせたというよりは、強制終了だったけどな」

杏子は自分の部屋に朗生を案内した。

どうやら、神浜市から帰った彼女は数日後に保護されてしまったらしい。

まあ、待遇も悪くないので満足しているそうだ。

「それで、お前が追っていた奴はどうなったんだよ? お前が殺したわけじゃねえんだろ?」

「あの光で浄化されたのか知らんけど、消滅した」

「ひつでえな。完全に悪魔じゃねえか、そいつ」

「少々納得のいかん結末だったけど、ようやく神浜に帰れるんだ。

まあ、本当はしつちやかめつちやかかけちよんけちよんにしてやりたかったけど」
彼は緑茶を啜る。

「・・・そういや、お前さ、幼馴染とかいなかったか？水波レナとかいうやつ」

「ああ、いたな。最近、すっかり忘れてたけど」

「いや、覚えとけよ！アイツ、かなり会いたがってたぞ？」

今、電話してやるか？多分、すつごく喜ぶぞ」

「帰って寝たい。アイツに会うのはその後だ」

朗生は二年に及ぶ長い旅をようやく終えることができた。

その後、何が起ころうと、もう何も興味がなかった。

この事態にだつて興味はなかった。

人類は怯えているが、同時に勇敢でもあった。

勇気をもって、他者と向き合うことを選んだ。

あの一週間以前の人類だったら、魔女狩りに似た事態に発展していたかもしれない。

だが、人々は悩める他者に寄り添うことを選んだのだ。

もちろん、生物災害になつてしまった者に対するバッシングは依然として存在する
が。

神浜市のとある料理店の娘がそうだったのがいい例だ。

だが、人類はそれでも進みつつある。そして、朗生はその進歩に興味がなかった。優しい風が窓から吹き込んできた。

「・・・杏子、お前から見て今の世界はどんな感じだ？」

「一言で言うなら、ウザイ」

「だろうな。お前ならそう言うと思ったよ」

「・・・でも、心の底から気にかけてくれてるのも確かなんだよな」

朗生は立って、窓に腰掛ける。

「俺は別にどつちでもいいかな。住みやすくなるんだったら。」

まあ、生物災害に殺されるのだけは勘弁なただけだな」

「お前だったら倒せるんじゃないか？」

「やれなくはないな」

世界は前と同じように厳しく、それでも優しくなった。

この心地よい風がその証拠だった。

その後、風見野市を後にして神浜に帰っていった。

決してレナに見つからないように注意深く家まで向かった。

前世と違い優しく愛情深い家族と住んでいた家に。

今ではもう朗生しか住む者がいない家に。

「……ただいま」

彼はシャワーを浴びた後、ソファに横になった。

彼はようやく安息を得ることができた。

この瞬間、ようやく転生者朗生の復讐譚が終わったということが実感できた。

血塗られた二年間はようやく終わりを迎えたのだ。

「……また優心に剣を返さねえとな」

包帯の巻きついた剣を見て、そう呟いた。

彼が光となったということも知らずに。

拠点発見

「へえ、お前も優心に会ったことがあるのか」

「ああ、親友しんゆうだったんだ。

まあ、一回しか会ってないのに親友ってのもおかしいが」

「まあ、アイツは変わった魅力があるからなあ」

かこが夏目書房を訪れると、鉄雄と青年が話していた。

青年のことを、彼女は知っていた。

「・・・朗生さん、どうしてここに?!」

「あれ、かこさん、知り合い?」

「知り合いも何も、私の通ってる学校の上級生です!」

・・・二年間、どこに行ってたんですか?

みんな、心配していましたよ」

朗生の顔が少し悲しげなものになった。

「・・・すまん。ようやく、やるべきことを終えたから。

いや、何かに終わらされたといったほうがいいのか?」

鉄雄はこの場ではあまり詮索しないほうがいいと察した。

朗生という青年はよく見れば、修羅場をくぐり抜けたような表情をしている。

これはしよつちゆう学生と衝突していた機動隊員と同じ顔だ。

あの時代、彼らは命がけで学生たちに臨んでいたのだから。

「……まあ、その話は今はよしておこうぜ」

朗生も鉄雄の気遣いを察してくれたようだ。

「俺は今、優心というやつを探してるんだ。この剣を返したくてな」

彼は腰につけていた剣を手を取った。

それは包帯でぐるぐると巻かれて、羽飾りがついていていた。

ネジレと似ているようで似てないような気配を発している。

だが、とにかくそれが優心の作ったもので間違いないのは確かだ。

こんな武器は優心にしか作れないだろうから。

「……アイツは長い一人旅の途中だ」

朗生はまたしても鉄雄の気遣いを察してくれた。

「そうか……まあ、そう長くは生きれないと思ってはいたが。

でも、今の世界だったら、アイツも生きられたのかもな……」

朗生はこの先、何も知らずに済むだろうと思った。

英雄に祭り上げられるのを、優心は好みそうにないから。

今、世界が（恐怖心からとはいえ）優しい方向に向かっているのは優心のおかげなのだ。ニュースで二木市が壊滅したと知ったときはさすがに驚いたが。

前世の故郷が壊滅すれば、誰だってそうなる。まあ、死人が出てないだけ何よりだ。「さて、俺はどこに行こうかね？」

アイツが旅の途中なんじゃ、直接返しにはいけんし」

「・・・里見メデイカルセンターという場所がある。」

そこが優心の家だったから、そこに行けばいい。

ただし、妹さんは兄を憎んでいたから、地雷を踏まないように」

「そうか、ありがとう。じゃあな・・・」

彼は店から出て行った。

「そうそう、その刀、すつごく良さそうな気配がするぞ。」

大事にしろよ。多分、お前の命をこれから何回も救うと思うから。

優心の剣が俺を何度も救ってくれたようにな」

彼の姿が完全に見えなくなったのを見計らってから、かこが話し始めた。

「・・・朗生さんの家族は、全員殺されてしまったんです」

「やっぱり重い背景があったか」

「その時、朗生さんは友人の家に泊まってたから難を逃れたんですが……」

そのあと、彼は犯人に復讐するってどこかに消えてしまったんです」

あの表情からして、復讐は終わったようだが。

どこか不完全な形であったのであろうが。まあ、本人もこれ以上は望んでないようだ。

過度な復讐はその後の報復も生むのだから。

別に鉄雄は復讐が悪いこととは思ってはいなかった。

人類史は復讐の歴史ともいえ、良くも悪くも多くのものを残したのだから。

「……とにかく成功したようだな。」

まあ、俺たちがとやかく言うことじゃないのは確かだ」

「……朗生さんの気持ち、少しはわかるような気がします。」

私たちも同じような目的でチームを組んでいたから」

「ああ、ななかのチームか」

ななかの一派は最近解散したのだ。

彼女が多忙になったからだ。

彼女の高弟たちが光の影響を色々と受けたからだ。

中にはネジレたのもいるくらいだ。それは鉄雄たちが倒したが。

華道のことはよくわからないが、なかなかだけが後継者となったらしい。もともと復讐対象が消えたのもあって、チームは解散となった。

この前、彼女が店に来たのもそれを伝えに来たからだ。

まあ、ほむらと一緒に悪ノリして、ひどい幕切れとなったが。

「アイツぐらいかね、この状況で得をしたのは」

それはそうと、困った事態に鉄雄たちは直面していた。

「鉄雄、やっぱり駄目だわ」

華宵がそう泣きついてきた。

人妖精でいくら探しても、彼の拠点は見つからないのだ。

とりあえず、三人で輪になって話し合うことにした。

ほむら？彼女はずっと筵で正座させられているが？

この前のことをまだかこから許してもらえていないようだ。

「・・・よく考えてみたら、端にあるとも限らないんだよな。」

あくまで、トランサーと状況が正反対というものなんだからな」

「そういうことよね・・・となると、どこかの工場かしら？物理学という方面で考えれ

ば」

「では、工業地帯のどこかにテルミナスがあるということでしょうか？」

三人はファウンテーション（銀河帝国の興亡）を読んでないとわからない会話を始めた。

ほむらにとって、それは苦痛だった。

一般人が椅子に拘束されてアイドルオタクたちの談話を聞くようなものだからだ。

そして、鉄雄はある地区の存在を思い出した。

「・・・工匠区じゃねえか？あそこ、ある意味では工業地帯だし」

「確かにそこら辺はホーリエにも探らせてなかったわね」

「鉄雄さん、グツジョブです！」

「まだ安心はできませんぞ。問題を解くのは俺たちだからな。」

まったく、優心もハリ・セルダン並みに難しい問題を出しやがるな」

やっぱり、ほむらには彼らの言語が理解できなかった。

「・・・そういえば、手記には書かれてないの？」

華宵の疑問はもつともだった。

「いや、優心は具体的な場所とか計画は書いてなかったんだよ。」

おそらく、詳細な情報はそこで手に入れろってことだろ」

ともかく、あとはホーリエの報告を待つのみだ。

そして、今度は正解だった・・・らしい。

やはり工匠区にあったようで、車両基地の中だとか。

ただ、問題があったそうで・・・

「なんですって？中が見れなかった？

変な縄が境界みたいな役割を果たしてる？

さらに、その場所自体にガラの悪い魔法少女がたむろしてるって？

会話から察するに、神浜の外から来て、神浜の魔法少女を憎んでるつですって!!」

とにかく、状況がマズいのはわかった。

もし、いつもの三人で行ったら、ほむらは誤解で攻撃されるかもしれない。

華宵は魔法少女と間違えられるかもしれない。

そうなると、最善策は・・・

「えー、こちら華宵航空工匠区行き。

ただいまより、降下を始めるわよお！」

「ノリノリだな」

華宵は抱えていた鉄雄を離れた。高度十メートルから。

「私は魔法少女じゃないから攻撃しないでね」

彼女はそう言いながら遠くに避難していく。

鉄雄はさらっと着地することに成功した。

1970年代では、こうした度胸試しは普通だった。

「さて、この建物か」

彼はそのまま建物の奥深くにあるというドアを目指した。

魔法少女たちは何も仕掛けてこなかった。

おそらく、まだ警戒段階にあるのだろうか。

まあ、一般人にはそう簡単には手を出せないのもあるだろう。

そして、ついにたどり着いた。

ドアには一つの絵が描かれていた。脳に刃が刺しこまれている絵だ。

そして、ドアノブは縄で結ばれていた。

その縄にはネームタグが付いていた。

G
o
r
d
i
a
n
K
n
o
t

ゴルディアスの結び目、つまりはそういうことだ。

鉄雄は刀でその縄を断ち切った。

すると、ドアはあっさりと開いた。

中は思ったよりも広い研究室だった。

そして、あらゆるものに優心の息吹を感じられた。

奥にはもう一つのドアがあった。

開けると、今度は上品な執務室だった。壁にはこんなものが書かれていた。

LOBOTOMY CORPORATION
FACE THE FEAR, BUILD THE FUTURE

もちろん、さっきの脳に切り込みを入れる絵も。

おそらく、ロボトミー手術を意匠に入れたのだろう。

ある意味では、人間の病気を治そうとした優心らしいと言える。

「あら、こんな部屋があっただなんてね」

・・・魔法少女たちも接触を試みてきた。

二木市の魔法少女との駆け引き

彼の前に立っているのは角の生えた魔法少女だ。

その顔にはどこか翳りが見えた。

彼女は何かに苦しめられているのだろうが、それが何かはわからない。

「・・・俺は神浜の魔法少女の指導者の地位にいる奴と敵対している。

向こうは俺のことを知らんだろうが。そいつの名前は和泉十七夜だ」

あえて、敵を特定したような言い方をした。

これなら、かこと協力していることがバレても問題はない。

指導者と敵対しているのだから、普通の魔法少女とは敵対していない。

そう言い訳することで煙に巻くことができるからだ。

学生紛争もこういった内ゲバ的外交が展開されたものだ。

「・・・敵の敵は味方、と言いたいのかしら？」

「どうぞお好きなように受け取ってくれ」

すると、彼女は指を鳴らした。

その瞬間、中世の軍服姿の魔法少女がレイピアで斬りかかってきた。

とつきに刀を抜いた。いや、抜かされたというべきか。

この刀は使用者の体を都合よく操ってくれるらしい。

レイピアと刀がぶつかり、火花を散らした。

「・・・なかなかいい刀つすね」

少女は今の動作が鉄雄の意思によるものでないと見抜いた。

まったくその通りだと鉄雄も思った。

朗生の言う通り、自分はこれからもこの刀に命を救われるのだろう。

「そこまでよ、ひかる・・・試させてもらったわ、ネジレ探偵さん」

「・・・どうして知ってる？」

「あら、確証はなかったのよ？」

鉄雄はしまったと思った。この少女はカマをかけたのだ。

「でも、神浜ではずいぶんと噂になってるわ。

正体不明の魔法少女と、よくわからない少女と、

それを率いる謎の刀剣男子ってね。

探偵さんということは、真実を突き止めにここに来たのかしら？」

「探偵つてのは誰かが勝手につけた渾名だよ。

十七夜とかいう奴からすると、犯人役かもな」

「じゃあ、何かやらかそうとしてるっすか？」

彼は *Robotomy* のロゴと理念を指さした。

「親友の遺志を継ぐというやらかしさ。」

本来、世界は七日間の光に包まれるはずだった。

ところがどっこい、十七夜とみたまとかいう奴の裏切りでパーになった。

その結果が、お前たちの故郷の壊滅だろ？」

鉄雄は彼女たちが二木市の出身だと直感的にわかったのだ。

そこは前世の故郷だったから、何となく同郷者がわかるのだ。

「……どこまで知っているのかは聞かないわ」

「端的に言えば、他はほとんど知らないさ。」

お前たちが神浜の魔法少女を憎む理由つてのも。

だが、俺はその中の二人に一発かましてやりたいし、

お前たちは全体にかましてやりたいんだろ？

だったら、俺たちは目的がだいたい同じだろ？

安心してほしいが、ネジレ探偵の一人である魔法少女は市外の魔法少女だ」

すると、彼女は金棒をこちらに向けた。

「悪いけど、転生者は信用できないのよ」

「・・・確かに俺も転生者だけど、一回目の人生はこの世界で、二回目のこの人生だつてこの世界なんだぞ？」

田中鉄雄つて調べてみるよ。それが俺の前世なんだから。

まあ、今回も名前は同じなだけだよ。

つまり、俺もこの世界の住民の一人つてことなんだ」

「・・・あの田中鉄雄？」

「何を思い浮かべたかは知らないが、その田中鉄雄だよ」

「正気と融和を訴える演説をしたら、ゲバ棒でグチヨグチヨにされた、あの鉄雄？」

「吐くぞこの野郎。まだトラウマなんだからよ」

「・・・なら、奪われる痛みというのは知ってるのね。」

あの日、ネジレやがったのは転生者だったから」

鉄雄は何とも言えない気持ちになった。

「でも、アンタが親友と呼ぶ人間は気に食わないわね。」

アンタと違って、別の世界とやらから来たんでしょ？」

「そうだな。でも、とっくにこの世界の住民と一緒に歩んできた」

鉄雄は懐から手記を取り出す。

「これでアイツの人となりを知ることができるぞ。全部ハングルだけだな」

「大丈夫よ、近所の人から習ったことはあるんだから」

彼女は手記を取り上げて読み始めた。

「・・・朴のおっさん、まだ生きてるのか？」

「いえ、そのお孫さんよ。さすがに祖父のほうは死んでるわ。」

大往生だったそうよ・・・本当にこの世界の住民だったようね」

まだ疑っていたようだが、これで完全に信じてもらえたようだ。

二木市ネタでこうやって話すとは思わなかった。

「科学者というよりは詩人ね。会ってみたかったわ」

「アイツは今、どこにでもいるぞ。俺の心にもお前の心にも」

「それ、レイプともいうんじゃないかしら？」

「いくら優心でも、ホモはごめんだ」

こうやって謝るのは卑怯かもしれない。

でも、言わせてほしい。ごめんなさい。

僕の独断で、世界に光の種を蒔こうとしています。

これが独善だということは、僕にもわかっていきます。

この罪を償うためなら、死後、どんな責め苦を受けることになっても受け入れます。

でも、どうか灯花だけは許してください。確かに、僕みたいな転生者に兄の資格はないでしょう。

それでも、たった一人の妹なんです。どうか、どうか・・・

「・・・信じてもいいわ、しばらくの間は」

「そうか・・・ありがとう」

「でも、本当はこの手記を書いた馬鹿をぶつ殺したいくらい。

こいつが何かやらさなければ、私たちの街は壊滅しなかつたはずだもの。

というか、今も夢に出てくるんだから。里見優心と名乗る馬鹿が」

「えっ」

「復讐はやめろとか、治療をおとなしく受け入れてくれとか・・・」

よくよく考えてみれば、不思議ではない。

彼は光となって、世界中に散らばったのだから。

「まあ、五月蠅いから最近は殴ってるわ」

「やめてくれよ・・・」

「あと、灯花とかいう奴はぶつ殺す方向よ。

そいつのせいで二木市の魔法少女は殺し合ったんだから」

「・・・鬼だな」

「鬼よ?」

こうして拠点を使うことは可能になった。

一種の協力関係を結ぶことになったのだが。

問題は、このことをかこにも伝えなくてはいけないということだった。

「そーいや、名前は?」

「紅晴結菜よ、よろしくねえ」

審判を下して

「・・・まさか、生物災害に襲われるなんてな。

不運な目に遭ったな、お嬢さん」

「ふ、ふゆう・・・助けてくれてありがとうございます」

ぺたりとへたれこんだかえでの前に立っているのは一人の青年。

目元を包帯で覆い隠し、黒い服にも包帯が巻かれていて・・・。

さらには包帯のついた剣まで持っていた。

彼はその剣を腰に差して、かえでの手を取った。

魔法少女に変身するのが遅れてあわやというところで助けてくれたのだ。

「さて、この光はどうするべきか・・・」

青年にとつては不要なようだ。

だが、かえでたち魔法少女にとつては必要なものだ。

ライトはグリーンフシードに代わる新しい資源だ。

「そ、その・・・信じてもらえないと思うけど・・・」

彼女はソウルジェムを取り出した。

すると、青年はとくに驚きもしなかった。

「へえ、魔法少女だったのか。」

まさか、この光でも穢れが取れるなんてな。

てつきり、グリーンフシードでしか無理かと」

「・・・知ってるの？」

「旅の途中で二回ぐらい会ったな。」

一回目は近くの風見野市で。

二回目は変わった奴らだったな。

戦えないけど、調整できるっていうの。

まあ、黙ってるから安心しろ」

かえでは水波レナと十咎もこをテレパシーで呼んだ。

あと、最近知り合った魔法少女の智珠らんかも。

「・・・俺が魔法少女だったら、全部独り占めしてたな」

「・・・聞こえてたの？」

「どうも俺も境が薄くなってるようで。多分だけどな」

彼は肩をすくめた。

「じゃあ、どうして私を助けたの？」

「目の前で死なれると気分が悪いからな。

目に映ったものだけでも助けるつもりだ。

それ以外も助けろっていうんだったら労基署に駆け込むぞ」

「……ごめんなさい」

「いや、お嬢さんの反応のほうが当然だろうな。

言ったら、俺も境が薄くなってるって。

人間としての倫理観もだんだん怪しくなってきた」

そうこうしているうちに、レナとももことらんかが駆けつけてきた。

「アンタがかえでを助けてくれたのか！ 本当にありがとな！」

「いや、そこまで頭下げなくていいって……」

「……」

レナのほうは黙って頭を下げた。

「レ、レナ……お前、お腹でも壊したのか？」

「ひどいわよ、ももこ！ 私だって素直に頭を下げることはあるんだから！」

「ふゆう、やつぱりいつものレナちゃんだ」

「そうね、相変わらずね」

青年はそれを見て微笑んだ。

あくまで、口元だけしかわからなかったが。

「じゃあ、俺は帰るぞ」

「ま、待ちなさいよ！二年ぶりに会って、その態度!!」

「・・・バレてたか、レナ」

「当たり前よ、朗生！幼馴染を忘れるほど薄情じゃないわよ！

どんなに変な格好をしても、朗生は朗生だもん！」

なんと、レナと青年は幼馴染だったのだ。

道理でさつきは素直に頭を下げたはずだ。

しかし、かえでは不安になった。

この青年は境があやふやになっていると自分で明言した。

もし、彼がネジレになることがあれば・・・誰が手を下すのかが問題になる。

「俺が生物災害になってもか？」

案の定、青年はそう聞いてきた。

ネジレ、生物災害、化け物・・・名称は一致しないが、どれも同じものだ。

魔法少女はネジレ、公的機関は生物災害、まだ状況に慣れてないものは化け物。

そんな感じに呼んでるのだ。

「・・・当たり前前よ」

さつきよりかは齒切れの悪い答えだった。

幼馴染を殺さなければ、光は手に入らないのだ。

「安心しろって。いざとなりや、審判は自分で下すつもりさ」

朗生の意図は明らかだった。自殺だ。

「・・・アンタ、どうして簡単にそう言えるの？」

らんかは青年の発言が不満のようだ。

確かに、自殺するというのは倫理的には良くない手だ。

まあ、増えているのも確かだが。ネジレにはなりたくないとはばかりに。

「・・・生きるには、俺の罪は重くなりすぎたんだ」

彼はそう言いながら、剣の柄に触れた。

「この剣で二年間どれほど血を流したと思う？」

復讐に走るあまり、無関係な奴らまで血祭りにあげてしまった。

しかも、肝心のターゲットはこの前の光で消滅だ。

人間だったはずだが、俺以上に黒くなってしまったんだらうな。

ともかく、ジャステイティアの名を持つこの剣でしか審判は下せないんだ」

レナの悲しそうな表情を見て、青年は微笑んだ。

「安心しろ。当分の間くらいは生きるのを楽しむつもりさ。」

ある日、俺が突然いなくなっても、俺が災害に巻き込まれたと思ってくれたらいい」
そのあと、四人で光を分割して、朗生も加えてゲーセンに向かった。

せめて、当分の間、一緒に楽しみたかったというレナの希望だ。

・・・らんかは朗生という青年に激しい嫌悪を抱いていたが。

この青年は、自分が死んだとしても災害に巻き込まれたと思えばいいと言ったのだ。
彼は境がだんだんと薄くなってるのか、それとも二年間の経験なのか、倫理もあやふやだ。

誰が死のうと、彼は言うに違いない。災害に巻き込まれたようなものだ。

彼はまさか自分が殺したものですら、災害に巻き込まれたものだと思ってるのか？

らんかは神浜の魔法少女を殺したいくらいに憎んでいた。

だが、この青年は違う。この青年は存在してはいけないのだ。

存在してはいけない生物、それがらんかの抱いた印象だった。

こんな生物が、普通に目の包帯を外し、普通に笑って、普通に楽しんでいる。

しかも、彼自体、その異常性を自覚しているに違いないのだ。

だから、さつきも自殺しようと言ったのだ。自分が異常だとわかっているから。

激しい嫌悪感が彼女を襲ったが、それを表情には決して出さなかった。

こんな者の存在を認めてはならない。そうしないと、こいつは絶対に言うに違いな

い。

「二木市の魔法少女が殺しあつた？」ご愁傷様。まあ、災害に巻き込まれたようなもんだ。だからこそ、絶対に殺すと決めた。魔法少女ではないが、こいつは一般人ですらない。ただの、存在してはいけない何かなのだ。かつての仲間たちのためにも、殺すのだ。自殺なんて許さない。誰かの手で、絶対に審判を下さねばならないのだ。これは復讐とは関係なしに、やらなくてはならないこと。

最後の復讐

常盤ななかは調整屋の前に立った。

「・・・それで、どうして付いてきたんですか？二人とも」

志伸あきらと純美雨も彼女についてきていた。

もう、チームはとっくに解散したというのに。

「ボクもみたまにカチンときたからね」

「ななかにだけ危ない橋は渡らせないネ」

「巻き込まないためにチームを解散させたはずなんですけど・・・仕方ないですね」

三人とも、ネジレを他の魔法少女よりも積極的に狩っていた。

だから、他の魔法少女よりも強いし、ソウルジエムも濁りにくくなった。

まだ十七夜には敵わないが、それでもみたまなら何とかかなると思ってた。

三人は調整屋に踏み込んだ。これが最後の復讐だ。

メルという子がいる。その子はどうしても占いが好きだ。

僕のことにもよく占ってもらっている。

不安なのは、その的中率だ。ほぼ当たるのだ。

でも、未来というのは意外と変えられるらしいのだが。

そこで、自戒のためにも占ってもらった。

悲惨な未来が待っているようなら、それを避けるためなのだ。

もちろん、計画のことを上手く伏せたうえで。

・・・彼女が見た未来はあまりにも暗いイメージだった。

「三人の少女が下水道に流されている」

失敗するということか？それとも、成功しても未来は暗いということか？

ともかく、親友たるチヨルチン鉄雄に後は託している。

後は・・・三日後のシナリオ開始を待つのみだ。

敷地の護衛は村宮に任せている。僕はシナリオを遂行するだけだ。

この研究所とも永遠におさらばだ。

最後のレポート（鉄雄訳）に書かれた内容から、優心は計画失敗を知っていたのかも
しれない。

だが、それはあくまで自分の失敗によるものと思いついていたのだ。

実際はそうではなかった。彼は裏切られたのだ。信じていた人間に。

裏切られたのは彼だけではない。村宮という男もそうだろう。

鉄雄たち曰く、彼は北養区の山中で人間を避けながら暮らしているらしい。

よほど、残酷な裏切りに遭ったといえる。

「・・・いい人ほど、馬鹿を見るんだね」

笠音アオはそう呟いた。

「そうだな」

鉄雄はそつげなく返事した。

「俺もまともなことを言ったら、殺されたしな」

「・・・どうして、人を信じてられるの？」

「生きるためには信じるしかないんだ。」

まあ、妥協と言ったところだ。前世のころからわかってたさ。

民青も革マルも妥協していたところはあったし。

「・・・お前の姉さまも妥協と言うのを知るべきだと思っただけだな」

「割り切ったの？」

「ああ、割り切ったさ。割り切るしかないんだ。」

アメリカだってそうしたからな」

彼は読んでいた新聞を彼女に見せた。

アメリカは新自由主義を捨て去る覚悟のようだ。

カナダやスウェーデンのような人に密着した福祉システムの採用が為された。もはや高層マンションで隣人のことを知らないというのはありえなくなった。崩壊したのは新自由主義だけではなかった。

韓国の財閥資本主義でさえも崩壊の兆しを見せつつあるのだ。

イカロスの翼の羽になるのが幸福ではないと理解したのだ。

「妥協、これこそが最も人類史で演奏された美しい音楽だと俺は思ってる」

「でも、それって諦めとも言えないのかな？」

「諦めることが必ずしも悪いこととは言えないな。」

スウェーデンはフィンランドの奪還を諦めて国内改革に成功した。

オランダ、スペイン、ポルトガルも同じような感じだ。

戦争を諦めて、平和と金を得ることができた。

ムガル帝国とかつていうインドに存在した国も諦めで生まれたんだぞ。

昔の領土の奪還を諦めて、ヒンドウスタンを手に入れたんだからな。

お前の姉さまも・・・一応は俺たちと手を結ぶという妥協をした。

優心に復讐するという目標をいったんは諦めてな」

「でも、諦めてばかりで意味なんてあるの？」

確かにアオの言うことはもつともだ。

だからこそ、もう一つ大事なポイントがあるのだ。

「ただ一つ、自分が大事だと思つたことは決して掴んで離すな。

俺は死ぬ直前にそうしたし、今回も親友テオルチンの遺志を貫くつもりだ」

「・・・強いんだね」

「そうか？」

僕は知っているのだろうか

僕が死に就く日にも

君は僕の心の奥深くに入り

僕と共に整然と横たわらんことを。

「・・・やっべ、剣を返しに行くの忘れてた。

こっそり、病院前に置いていくとするか・・・うん？」

夜明け前、朗生は三人の少女が水路に浮かんでいるのを発見した。

彼はそこに自分の末路を見出したような錯覚に陥つた。

なぜか本能的に彼女たちが復讐者だったとわかつたのだ。

復讐を望んだ者たちの末路が、これなのか。

「仕方ねえ、返すのは明日にするか」

彼は遺体を引き上げて、近くの土手にこっそりと深く埋めた。

本当は面倒なのでゴミ箱に捨てたいのだが、まだ倫理観はギリギリ残ってた。

この剣を地面に斬りつけるだけで、だいぶ深く斬れるのだ。

「……」愁傷様で。まあ、災害に巻き込まれたもんと思つて成仏しろ」

墓標は作らなかつた。面倒事になるし、復讐者に墓標など必要ないのだ。

復活の混沌

ずいぶん面白いことになっていた。

世界レベルで物事が変わりつつあるのだ。

あやふやになっていた更紗帆奈という意識も復活した。
存在感のあふれる幽霊といった感じだ。

まあ、姿を隠すのも思いのままなのはありがたいが。

とりあえず、高みの見物と参ろうか。

「あつは！本当にぐちゃぐちゃ！」

環いろははかつての友人の残滓と戦うことになった。

「・・・どうしてウワサを倒したら優心さんが」

「僕自身は優心ではありません。」

光の種とイブの感情が融合して生まれた存在なんです。

僕はあなたたちに試練を与える存在・・・。

ベースとなる感情は恍惚、どうか僕を倒してください」

「・・・どうして？」

「道を作るためです。道は何通りあってもいい。
親友チヨルチンも道を歩んでいます、

他にも道を用意しておかないと、また失敗してしまうから」

それでも、環いろはが彼に武器を向けることなどできなかった。

彼女はへたり込んだが、彼は手を差し伸べた。

「真つ直ぐ立てる意志を持つてください、いろはさん。

あなただつたら戦えます。それに……」

彼はいろはの仲間たちを指さした。

「あなたにはういさんを守り抜く勇氣があるし、

快く信じ任せられる相手だっているじゃないですか。

だから、この試練だつて乗り越えられるはずです」

帆奈は視点を移す。

「……そういや、あのらんかつて子は？」

「……ちよつとした都合でいないわ」

「そうか……」

「アンタ、前より薄くなつたわね……」

「まだ禿げてないぞ」

「そりやそうでしょうが！ 私たちまだ中学生よ！

私が言っているのは・・・その・・・輪郭というか」

「どんな境が薄くなってるって言ったろ？」

「こうして人語で喋れるのも、もしかすると奇跡かもな」

「・・・」

「そんな表情するなって。ほら、さゆさゆのグッズだぞ」

「わあい！」

視点を移す。今度は少し遠い風景。

「・・・みたま、破ったのは中立だけやないかもしれん」

「そうですか。それは対処が必要ですね」

「ふんふんふん」

そんな三人の傍には異質な男がいた。

その男は深い爪を武器にしていた。

「・・・だから信頼するなと忠告したのに。

あんな憎悪に囚われた女をシナリオの協力者にするなんて。

やはり、あの男は人を信じすぎるくらいがあつた。

おかげで、調整屋も危機に立たされてる。

グリーンフシードの供給は不安定だし、強くなるのに調整屋も必要なくなった」

「九郎、優心の非難をしてもしょうがないで」

「わかってますよつと。あと、朗生の復讐相手は消えました。

死体も見つかりませんでした。おそらく、あの光で消滅したんでしょう」

「相変わらずの調査能力ですね」

「これくらい何ということはありませんよ。

ただ・・・アイツは殺しすぎた。もう何もわからなくなってるでしょう。

そうじゃなくても、二年もあんなものを装備していたら、どうかなってしまふ。

ただでさえも、幼い不安定な光の種を浴びたというのに・・・」

「私もちやーンと忠告したんやけどなあ。殺しすぎやっつて。

まあ、ヤクザも光で解散状態やし、問題ないやろ。

・・・魔法少女に喧嘩を売りさえしなければの話やけどな」

別の場所に視点を移そうとすると・・・

「ありや、幽霊か？ずいぶんと存在感があるな」

一番注目しているのが背後に立っていた。

本当は高みの見物が好みなのだが。

「いらっしやい、ネジレ探偵さん。」

このビルの屋上、気に入ってるんだ」

もはやネジレ探偵だと指摘されても鉄雄は動じなかった。

「ここで自殺したのか？」愁傷さまで」

「自殺したのは別の場所だよ。」

それで、ななかつてやつを探してるんでしょ？」

鉄雄は彼女の隣に腰かけた。

「いい景色だな」

「いい景色でしょ？」

彼は深く息を吐いて、言った。

「それで、幽霊のお嬢さん。」

どこまで知ってるのかは知らんが、ななかさんの居場所は知らないかい？

数日前から行方不明なんだよな。結菜さんたちもやってないっていうし」

「・・・あの光が蒔かれてから、千里眼っぽいのを使えるようになったんだ」

「それで？」

「見えたんだけど、薄暗いというか、真っ暗というか・・・。」

「ありや、どう見ても土の中に埋まってるね」

「具体的にはどこの土の中だ？」

「新西区の土手だね。三人とも、そこに埋まってるよ。」

「雑に埋葬されてるけど、まだ腐敗はしてないね」

「そうか・・・それをかこさんにどう伝えればいい?」

「私が間接的に知ってる男は数百万年もかけて、自分で考えてたよ。」

そして、その考えを種として世界中に蒔いた。ドMだね。

「アンタもそんな奴の後継者なら、自分で考えるようにしな」

彼女はふっと消えた。

「・・・いや、マジでどう伝えろってんだ?」

「あら、どうした?」

ほむらもビルの屋上にやってきた。

「実は・・・」

彼女に今起こったことを伝えた。

「確かに伝えるのは大変そうね・・・」

二人は地上を見下ろした。

ななかたちを探しているのは、ネジレ探偵とかこだけではない。

静海このは、遊佐葉月、三栗あやめ、竜城明日香、美風ささらといった魔法少女も加わっている。

さらには、参京院教育学園の魔法少女や木崎衣美里を中心とした魔法少女も参加していた。

彼女たちにどうやって幽霊から情報を得たと伝えるべきだろうか。

さらに問題がもう一つある。

「なんだろう。生存本能が幽霊のことを言っちゃダメだつて警報を鳴らしてるんだが？」

「奇遇ね、私も似たような感じよ」

ずいぶんと面白いことになっていた。

世界レベルで物事が変わりつつあるのだ。

そして、また物事は変わるだろう。この神戸市で。

更紗帆奈はそれをせせら笑いながら見物するだけだ。

日の本に悪鬼をもたらした元凶？

シレン。優心の姿をとった何かはそう名付けられた。

イブの感情と光の種の融合した何かだ。

倒すと、多くの光の種とプレスレットが手に入る。

そして、今日、時女一族とういたちは新たなシレンに遭遇した。

「……すみません、楽しい時間を邪魔してしまったようで」

(やっぱり、優心お兄ちゃんだ……)

ういはどうしてもシレンを倒すのに抵抗を感じた。

シレンはかつての姉の友人であり、兄のような存在だったからだ。

理想と現実を融合することに成功した彼はいつも憧れだった。

彼だったら、なんでもできると思っていた。

事実、彼はワルプルギスの夜を身を投じてまで弱体化できたから。

そんな彼と同じ姿で同じ話し方のシレンを倒すのは……。

事実、いろいろはも部屋に危うく引きこもるところだった。

「ういさん、そんな悲しそうな顔しないでください。」

「……皆さん、これは試練です。僕が司る感情は期待です」

シレンから強大な魔力が発せられた。

そんな彼に近づいたのは、時女一族の魔法少女たちだった。

「……あなたがしたことは取り返しがつかない」

時女静香はそう言った。

「あの光と闇のせいで、日の本の人々は悪鬼になつてしまふかもしれない。

日の本だけじゃない。世界中の人々があなたのせいで恐怖に苦しんでる」

「……その罪はいくらでも背負うつもりです」

シレンの態度は明らかに悔悛した罪人そのものだった。

「それでも、僕は期待しているんです。

もつといい存在に成れるという希望を持つてください。

それだけでも、ねじれの進行を遅らせることはできるはずですよ」

彼の声はよく透き通るようで、人をその気にさせることができる。

ういはそのことをよく知っていた。

「私でも、もつといい存在に成れると言うんですか?」

土岐すなおはそう尋ねた。

「ええ、鎖を断ち切り、恐怖に向き合う瞳があれば大丈夫ですよ」

ここが優心のすごいところで、どんな人にもかける言葉を持っているのだ。シレンでもその長所は変わらないようである。

逆に言えば、シレンの恐ろしいところはそこなのだ。戦う気になれない。

「・・・静香、すなお、お話は終わりだよ。

シレンさん、あなたを倒させてもらうよ。

日の本のためにも、世界のためにも、ここで御用だよ！」

広江ちはるが十手をシレンに向けた。

彼女はまだ自分を律していた。

「・・・そうしてください。

そして、存在意味に対する期待を持ち続けてください」

シレンは決して本気で戦うことはない。

まるで、力を試すように、そして、成長を促すように戦うのだ。

だが、それでもシレンは強敵でもある。

調整を受けてないはずの時女一族たちはそんなシレンを倒せたのだ。

ブレスレットが時女静香の手にはまっていた。

「・・・本当に悪い人だったのかな。

あの人からはまったく悪意を感じられなかったや」

ちはるはそう呟いた。

彼女も気がつかぬうちにシレンを人扱いしていた。

「・・・優心お兄ちゃんはいつも言ってたよ。

人類の心の病気を治すんだって。私もそれを応援してた。

決して、悪い人じゃなかった。どんな人にも優しく接してた。

なんとなくだけど、あのライトも優心お兄ちゃんのお薬だと思うんだ」

「・・・用法用量を果たせなかったんですね」

すなおの言ったことは当たってたことが後に判明した。

それも、優心にとつて不本意な形であつたことが。

だが、それはまたかなり後の話になるかもしれない。

「・・・もしかすると、優心お兄ちゃんはまだ諦めてないのかも」

「諦めてないって・・・今度はもっと酷いことになるかもしれないのに!」

静香は優心が許せなかった。彼の独善が再び行われようとしているのだ。

二回目を世界が耐えられるかどうかともわからないのに。

そもそも、人類の心の病気とはどういうことなのか?

ちゃんと証拠があるのかもわからないのに、彼は治療しようとしているのか?

どうしてそんなことをできるのか静香には理解できなかった。

果たして、そこに他人を思う心があるのかも。

(・・・里見優心、私はあなたを許さない)

事実、霧峰村でも悪鬼の被害が出ていた。

彼女は決して優心を許すつもりはなかった。

たとえば、彼が善意でやっていたとしてもだ。

ここからは色々と救いしかないオマケです。

シリアスの後にギャグなんていらんじや!という人はブラウザバックして、どうぞ。

支店3382の事案を受けて行われたSpecial Ham Ham Pam Pam | 2000の内部調査について、興味深い結果が得られたため報告させていただきます。

今回私たちはSH P | 2000深部、すなわち最も古く作られたであろう設備を改めて調査しました。そこで、おそらくSH P | 2000が「最初に」構築された際の記録とともにサンドイッチのレシピを多数発見しました。発見したレシピのうちいくつかはメールに添付しているので後程ご覧ください。驚くべきことにこのレシピによれば、ハムハムパンパンが複数の要料理団体と団結し、関係ない業界にまで姿を現してサンドイッチ造りに対する協力を呼びかけていました。

そして、これが一番信じがたいことなのですが、このサンドイッチはクソうまいのです。

私はサンドイッチが400年以上の歴史を持つただ挟むだけのお手軽料理でないことを知っています。だからこそ信じがたいことです……ほぼ2ヶ月で、世界を救うレベルのクソ美味サンドイッチレシピが構築し得たというのでしょうか。COOK5-1、私のクリアランスレベルでは不十分かもしれませんが、あなたも知っていることを教えて下さい。

最初の「彼ら」は、いったい何者だったんでしょう？

：

∴

——実際のところ、「彼ら」はただの人間に過ぎなかった。
サンドイッチを作るのだけはビビるほど上手だった。

∴

∴

∴

——挟まれてたまるか

「あれ、まなかは一刀両断されたはずじゃ……」

「あれ、俺、武器を背中にいっぱい刺されて下水道に放り込まれたはずじゃ……」
「うん？」

転生した天才料理少女と特色フィクサー……！

「このサンドイッチを作ったのは誰だ！」

「はっ、はい、私です！」

「貴様か……貴様はクビだ！」

どこの世界でも相変わらずな美食家……！！

「サンド、ヒート、プレス……このスローガンでいいかも」

サンドイッチ屋に命をかける普通の青年……！！

そんな彼らはSDークラス；”サンドイッチデリシヤス”シナリオを乗り越えられるのか……！！

近日公開予定（とは言っていない）！

別れの挨拶に来た元復讐者

鉄雄とほむらは夏目書房で待機していた。

かこが疲労とストレスでダウンしてしまったのだ。

そうになると、店番も必要となる。

そこで、二人で店番をすることになったのだ。

華宵にはなかなか探しを引き継がせた。

人工妖精で見つかるのは時間の問題だろう。

「・・・それにしても、誰に殺されたんだろうな」

「八雲みたまか和泉十七夜のどちらかだと思おうわ」

「ありえなくはないけど、どうしてだ？」

「あなたもなかなかには会ったでしょ？」

あれがだいぶ強い魔法少女だというのはわかったわ」

「確かに。普通の魔法少女じゃ太刀打ちできないくらいにはな」

そうになると、魔女かより強い魔法少女のどちらかとなる。

そして、魔女は自然と容疑から外されることになる。

魔女はご丁寧に埋葬なんてしないはずだからだ。

シレンとかいう存在もいるそうだが、優心と似た優しい心を持つてるから無理だ。ちなみに、鉄雄はシレンには会わないことにした。

会いたいのはやまやまだが、彼に迷惑をかけてしまうだろう。

「・・・そうなる、強い魔法少女なんて相場が決まってくるぞ」

「そうでしょ？でも、みたまと十七夜にしても疑問が一つあるのよ」

「なんだ？」

「遺体をわざわざ深いところに埋葬できるのかしら？」

「それも三人分の遺体を、深く掘った穴に？」

「それも夜の間に・・・普通だったら見つかるな。」

「よほど早く掘れる道具を使わないとな？」

「そうなる、埋葬したのは別の誰かという線もあるけど・・・」

あの二人に、そこまで協力する奴がいるとも思えないわ」

二人がしばらく唸りながら考えていると、人が入ってきた。

一瞬、誰かわからなかった。それは朗生だった。

前に会った時よりも、どこか輪郭があやふやに見えるのだ。

「いらつしやい、朗生。大丈夫か？」

「そろそろ大丈夫じゃないかもな。

今日はお別れの挨拶に来たって感じだ」

「・・・そうか」

今の朗生からすると、鉄雄の悲し気な表情は不思議に思えた。

どうして、他人の死を悲しんでいるのだろうか。

今、朗生が死にそうになっているのは災害に巻き込まれているようなものなのに。

どうして、彼は悲しそうなのだろう？彼はこうは思わないのだろうか？

自分は生き残れたから幸福だ

もはや朗生からすると鉄雄は異常者にしか見えなかった。

魔法少女だって異常者だ。自分は魔女にならなかつただけ幸運と思えばいいのに。

だが、それを口に出すことも表情に出すことも決してしなかつた。

まあ、あともうしばらく自分の肉体と理性は保てるだろう。

「じゃあな、鉄雄。まあ、その剣を大事にしろよ」

「ああ、この前、さつそく助けられたからな」

道を歩きながら、彼は考えた。

異常なのは自分ではなかつた。この世界なのだ。

隣人が生物災害になった？自分はそうならなかつただけ幸福と思え。

それなのに、彼らは怯え、隣人をいやに気に掛けるようになった。もともと、この世界は異常だったではないか。

だが、余計にそれに拍車をかけたのがあの光だ。

朗生から復讐の完遂を奪ったあの光。

・ ・ ・ もともと、朗生の前世は善良な人間とはいえなかった。

両親からの虐待はあった。毎日、殴られ、蹴られが日常だった。

その鬱憤を晴らすかのように、学校では加害者の立場となった。

適当に目を付けた同級生をターゲットにしたのだ。

家で受けた痛みを、自分がいじめていた人間に流す日々が続いた。

だが、そんな日々は当然のことながら終わりを迎えた。

被害者が自殺したのだ。もちろん、遺書をご丁寧に残したうえで。

このいじめを教師にバレないようにやっていたなら死ぬことはなかっただろう。

普通にバレていたなら、教師に叱られ、連絡を受けた両親にいつもより酷く殴られる

だけ。

だが、一番最悪な形でバレてしまったのだ。

いつもより酷いなんてレベルじゃない暴力を受けることになってしまった。

当たり所が悪かったのか、それが原因で死んでしまった。

目の前が雲の上のような場所だった時、彼はそれを不思議にも思わなかった。いつかはこうなるのが当たり前だと思っていたからだ。

「……えつと、君、転生する？ いや、転生しないほうが本当はいいんだけど……」
神らしき何かがぎこちない様子で話しかけてきた。

はつきり言つて、最高の話だった。

今度こそ、幸せな家族で、ちゃんと善良に生きてかった。

「チートじゃないの？ あつたほうがいいよ？」

朗生は娯楽を与えてもらつてなかったから、そういうのを知らなかった。

だから、求めなかった。神はそれでも必要だと言つたが、断つた。

彼が得たのはまさに絵に描いたような幸せだった。

優しい家族、素直じゃないが可愛い幼馴染……何もかもが上手くいった。

ある日、幼馴染の家に泊まった日……幼馴染以外の何もかもを失つたが。

後日、ある少年が自分の目の前に現れた。それは前世でいじめていた人間だった。

何もかもが彼に仕組まれたことだったのだという。

神様に転生させてもらえたのも、幸せな家族のところへ転生できたのも……。

全てはこの瞬間のため、そしてこれからも苦しめるためだったのだ。

なんてことはない。つまり、この人生は被害者の復讐のために用意された茶番だった

のだ。

茫然としてゐるうちに、彼は去つてしまった。

幼馴染に關しては予想外だったとか言つていたが、よく覚えていない。

路地裏ですつと座り込んでいた。そして、泣いて、笑つた。

そいつは肝心なことを忘れていた。復讐を遂げるまで、そいつは被害者だったに違いない。

だが、あんなむごたらしい復讐をしたならば、そいつはもはや加害者だ。

そして、今度は自分が被害者となつてそいつに復讐する番だ。

こんな考えがくだらない自己弁護に過ぎないのは自分でもよくわかつてた。

でも、こうでもしないと、この怒りは抑えられなかつた。

「……君、大丈夫ですか？」

そして、そんな彼に力を与えてくれたのが優心だつた。

エゴだとかエゴだとかよくわからないが、とにかく上級の武器だつた。

「余り物なので、どうぞ気にせず使い倒してください」

そんな武器を渡してくれた優心という恩人には刃を向けなかつた。

しかし、神浜を離れたとたん、あちこちに怒りをぶつけるようになった。

怒りがある程度収縮したのは、風見野で魔法少女に会つた時だつた。

まさかファンタジーな存在がいるとは思わなかった。

「いや、落ち着けよ」

「・・・」

さすがに少女を殺す気にはなれなかった。

「これ食えよ」

彼女はポツキーを差し出した。

「・・・いただきます」

少しは頭を冷やすことができた。

杏子と過ごした一週間は久々の安息だったのだ。

だが、爆発するような怒りが冷静な怒りになっただけだった。

やることは何も変わらなかった。怪しい組織をただ潰すだけ。

「・・・これ以上はやめとくんや」

再び魔法少女たちに会うことになった。今度は調整屋という魔法少女たちだった。

さらに、転生者という同類も付いてきていた。

「・・・酷い目をしているな。これ以上は何がなんだかわからなくなるぞ」

「・・・」

「アンタ、闇業界では噂になってるで」

しばらく交流をしている間に、少しは朗生の怒りも冷めてきた。

同じ転生者がいるというのも心の安定につながったのか？

それとも、彼女たちがカウンセリングができたからか？

「・・・お前の武器、あの男からもらったんだろ？」

「そうだけど？知り合い？」

「・・・俺はあの男に恩があるんですよ。俺の名もアイツに付けてもらっただし」

「へえ・・・」

改めて、優心という人間の偉大さも思い知った。

こうして、九郎からもらった情報をもとにターゲットを探した。

そして、ついにその日はやってきた。二年もかけて、ここまで来たのだ。

「や、やめろ！そのキチガイ武器を捨てるんだ！」

復讐相手は九郎曰く、鬼滅の刃とかいう漫画のラスボスの能力を持つてるらしい。

もつと言えば上位互換らしく、日光に当たっても死なないそうなのだ。

本当に大した調査能力だと思う。日輪刀も効かないそうのだ。

まあ、娯楽を前世の時に与えてもらってなかったからわからないのだが。

とにかく、わかるのは勝てるということ。

どういいうわけか、この剣に怯えているのだから。

「くそつ、他の転生者も殺しておくべきだった！よりもよってE、G、Oなんて……！」

「仕方ねえな。これがお前に与えられた罰ってことだ。

悔しけりや、また来世で俺に復讐するんだな。

まあ、その時はまた復讐しに行くけどな」

その時だった。光が世界を包んだのは。

そいつは光の前に塵となって消えたのだ。

こうして永遠に続くと思われた復讐の連鎖は断ち切られたのだ。

結局、朗生も何も得ることはできなかった。それどころか、境があやふやになっていった。

だが、彼は苦しんでいなかった。最初からわかっていたのだ。

自分が人間としての幸福を享受するにはあまりにも罪深かったと。

そして、その罪に対しては、他の誰でもない自分が審判を下すべきであると。

何も恐れは抱いていなかった。

もう、審判の結果なんぞは大災に遭ったのと同じようなものだ。

前世で酷い人生を送ったのも、今回の人生で報いを受けたのも、災害なのだ。

彼はもう何も恨んでないなかった。心が真っ白だった。

自分自身への怒り

そのシレンと対峙したとき、アオは理解した。

この男は自分自身に対して怒りを抱いているのだと。

彼は彼女たちに対しては優しいのだが、常に表情は険しかった。

「……皆さん、これは試練です。」

僕が司る感情は激怒……分別できる理性をなんとか保っています。

今はただ、あなたたちに倒されるのを待つのみ存在です」

「……テメーは何に対してそんなに怒ってんだよ？」

樹里も一歩近づいて訊いてきた。

「僕のでかした全てのことについてです。」

僕は彼女たちを裏切らせてしまった。

僕は村宮くんがあんな目に遭うのを防げなかった。

僕は世界中の人がねじれになるのを黙ってみるしかなかった。

僕は朗生くんが幻想体になるきっかけすら生んでしまった。

そんな僕の罪に対して怒りを抱いているんです」

「けつ、そんなことでいちいち怒りを抱いていたらおかしくなるぜ？
もつと気楽にやれよ、優心さんよ？」

「気楽にやりたくても、あの永遠の繰り返しはそれを許さないんです。

ねえ、皆さん。僕が何をやったかは恐らく知らないでしょう。

でも、外で二年が経つ間、僕の世界でどれほどの歳月が流れたと思いますか？」

アオは知っていた。彼の書いた記録用紙を読んでいたから。

結菜だって、それを読んで知ることができた。

樹里も間接的には知っていた。

そもそも、PROMISED BLOODの全員が何をしでかしたかを知っていた。

だからこそ、らんかはこう言うことができた。

「アンタ、独りでやろうとするからそうなるんだよ。

独りで考えて、独りで実行して、独りで後悔する……。

格闘ゲームとか、相手がいないとつままないじゃん。

少しは人に頼ったほうがよかつたんじゃないの？」

「でも、あのシナリオは過酷すぎるんです！」

「そこなんだって！アンタ、もつと人を信じるよ！」

らんかにはシレンの胸倉を掴み上げた。

「鉄雄のことを信じてないから、こんなことしてるんでしょ！」

こんな回りくどいマネとかして、そこまで他人が信じられないの!!」
そんな彼女の言葉に、シレンはハツとした表情になった。

「・・・ありがとうございます。」

僕は、彼という快く信じ任せられる相手がいたというのに・・・」

シレンは調子を取り戻したようだ。

「さあ、かかってきてください。あと、朗生くんをその調子でなんとかしててください」

「は？やだなんだけど？」

「そんな・・・クリフォト抑止で人間として維持ができるはずで・・・」

「あれ、もう維持とかってレベルじゃないと思うけど??？」

魔法少女とシレンの戦いが始まった。

相変わらず、シレンは本気では戦わなかったが、強敵だった。

それでも、最終的に樹里がトドメをさした。

「優心先輩そつくりの人が殺されちゃったの・・・」

御園かりんは茫然としていた。

「うん？優心とかいう奴と知り合いだったのか？」

「・・・やっぱり、私何も見なかったの。」

別に十七夜さんが怖いとかいうわけじゃないの、うん」

「ちよつと話、聞かせてもらおうじゃねえか」

「何も知らないの！村宮くんがぼこぼこにされたなんて知らないの！．．．あつ」

かりんは焼かれることなく、即座に拘束された。

神浜の魔法少女が駆けつけてきたが、戦っている場合ではない。

樹里たちはかりんを引きずって、即座に逃げ出した。

ともかく、重要な情報源だというのは確かなのだから。

問題は、結菜たちがボコボコにされた状態で帰ってきたことだろうか？

私は私

「・・・優心と大違いね。」

「アイツもよくこんな妹を愛せたわね」

結果は溢れ出る殺意を滲ませながら、そう言った。

優心は出るかもしれない犠牲に胸を痛めていた。

手記からはそれがよく読み取ることができた。

そして、どんな結果になったとしても妹である灯花の幸せを願っていた。

だが、灯花は違った。彼女は犠牲など何とも思っていないかった。

「優心さんも可哀そうっすね・・・こんな妹を持ってしまった」

ひかるも呆れながら言った。

そのころ、鉄雄はあることを思い出し出していた。

「あつ、地雷を踏まないようにアドバイスしとくの忘れてた」

「踏むとどうなるの？」

ほむらは訊いた。

「たぶん、あの様子だと怒り狂うと思うぞ」

鉄雄の読みはもつとひどく当たってしまった。

二木市の魔法少女たちは突然の殺意に圧倒されてしまった。

灯花は表情をとでも険しくしていた。

その瞳には、小学生が抱くものとは思えないような憎悪が籠っていた。

「……どいつもこいつもあのクソばかり鼻肩しやがって」

口調も、今までとは違い、余裕ぶつたものではなくなっていた。

一瞬、彼女の輪郭があやふやになったように見えた。

「なんのデータもエビデンスも提示しないくせに、

ぼくはじんるいのびよーきをなおしたい、とかほざいて、

そんな空っぽの言葉に大人どもは信じてた！」

彼女はぎゅつと手を握りしめていた。

そこから、血が流れていた。

「姉さまも！ねむも！ういも！パ。パも！」

あのバカ民俗学者も！その娘も！

みーんな、みーんな、あのクソに騙されてた！

それで、みーんなネジレになる運命になった！

わたくしも、あのクソにネジレにされる運命なんだよ！」

二木市の魔法少女たちは察した。

こりやあかん、地雷踏んじまった。

彼女たちは傷つけられる痛みを知っていたのに、

敵を前にそれを忘れてしまったのだ。

「・・・もういい。あのクソには地獄を見てもらうから」

彼女はボディにマツチが刺さった大砲を生成し、

服はスカートから炭や灰にのようなスーツに変わり、

そして口元にはたばこをくわえるようにマツチをくわえていた。

「くふふ・・・兄さま、きつと泣きわめくだろーなー」

わたくしが何もかもを燃やしちやつて、兄さまの夢を地面に叩き付けちやうんだから。

別にいいもん、わたくしはわたくしのやりたいようにやるもん。

わたくしは“里見優心の妹”じゃなくて、“里見灯花”だもん」

二木市の魔法少女たちは悟った。

こりやあかん、もうおしまいだ。

結菜でさえも、たくさんの冷や汗を流していた。

灯花はネジレたわけではなさそうだった。

あの子は、間違いなくE・G・Oを引き出せるだろうから。

あの手記にあったE・G・Oとかいうのを引き出したのだろう。

研究室の書類にすらその存在は示唆されていた。

そこからは地獄だった。

大砲から放たれた火球で吹っ飛ばされ続けたのだ。

立ち上がるたびに吹っ飛ばされ、逃げようとしたら吹っ飛ばされ、

立ち上がれなくても吹っ飛ばされ、気が付けば阿鼻叫喚の地獄だった。

(地獄ってのは、これほど熱いのねえ……)

もはや息も絶え絶えの結菜の視界に現れたのは、天使だった。

「だ、大丈夫!!」

よく見ると、それは天使ではなく環いろはの妹の環ういだった。

「だ、大丈夫よ……敵に心配されたくなんてないわ」

「あちこち火傷してるじゃん!無理しちゃ駄目だよ!」

彼女はスカート裾を破って、包帯代わりにした。

そんな彼女たちに、灯花は砲口を向けた。

「……うい、あなたも兄さまの味方だったね。

ごめんね、うい。恨むなら、兄さまを恨んで」

彼女が火球を放とうとすると、何か彼女を貫いた。

一言でそれを形容するなら、それは爪だ。

「安心しろ・・・ソウルジエムに傷はつけていない。

恩人の妹を、そう簡単には殺しはしないさ」

男はそう言うのと、灯花から丁寧な爪を抜いた。

「先生、治療を頼みますよ」

「ずいぶんとぎつくりとやったな。まあ、これくらいは大丈夫や」

先生と呼ばれた魔法少女が痛みに喘ぐ灯花を担架に乗せた。

「・・・すまん。これが俺のやり方なもんで。

俺の名前は九郎・・・あの男に名前をもらった」

新しい人生

最初に言っておくと、彼のいた世界はすでに存在しなかった。

何が起こったのか、彼にも理解できなかった。

辺り一面、炎の海で、地面は割れ続けていた。

空は完全に闇に覆われて、海は干上がっていた。

気が付くと、自分はいかにもあの世らしい場所にいた。

「すまなかった。君しか救えなかったんだ」

神と名乗る男は土下座した。

彼曰く、世界は邪神という存在に滅ぼされたらしい。

正確に言えば、邪神と契約した人間たちの手によって。

彼らは転生させてもらう代わりに、世界のエネルギーを奪ったのだ。

エネルギーを奪った意味はなかった。ただ、邪神の愉しみのため。

「・・・神様、俺に力をください」

「ああ、わかつてる」

彼は復讐を誓った。

それが彼の転生者狩りの始まりであった。

転生者狩りにはいくつの特権がある。

その一つはどんな世界的能力でも使えるということ。

彼はある作品の戦い方を選んだ。

Lobotomy Corporationの爪という戦闘員の方法だ。

実際、それは正解だった。

マイナーゲームということもあり、転生者は対策も知らなかった。

壁や地面関係なく移動でき、攻撃力もあり・・・。

そんな彼の特異な戦闘法を前に、転生者たちは無力だった。

そもそも、作中でも最強の戦力の一つに数えられるほどのだ。

また一人、また一人と復讐を遂げていった。

殺した中には、別の世界からの無関係な転生者もいた。

だが、それでも彼は殺した。

もはや、彼の中では転生者という存在自体が忌むべきものだった。

転生者を探し出し、全員殺す。そして、別の世界に行き、転生者を探し出し・・・。

その繰り返しだった。もう、何もわからなかった。

まあ、そのおかげで尋常ではない調査能力を得ることができたのだが。

「お前、転生者だろ？それも俺の世界を滅ぼした」

その日も、いつものように転生者を追い詰めた。

「わ、悪かった。謝る。お願いだ、殺さないでくれ」

夕暮れの砂浜で、転生者は命乞いをした。

「あんた、転生者狩りだとしても、反省しているものを殺したりしないよな」

彼はため息をついて答えた。

「たとえば小石を湖を投げたとしようか。」

あとでその小石が欲しいと思ってもだ、

それは二度と湖の底からあがってこないぞ？」

意図は明白だった。

「く、くそう、俺を殺るつもりか！」

彼にできることは、転生者を滅ぼすことだけだったから。

いつものように、転生者に向かって突進していった。

だが、それは転生者の策略だったのだ。

「時間稼ぎ成功つと。じゃあな。」

俺はこのリリな世界でハーレムを楽しむむから。

お前は絶望しかないまどマジ世界を愉しみな」

その転生者の能力は次元を歪めることだけではなく、対象から次元移動の能力を奪うことだった。

次の瞬間、彼は上空に放り出されていた。

受け身をとることもできずに、ダメージを受けてしまった。

傷ついた体を引きずって、人気のない路地裏を進む。

出血が酷い、骨もどこか折れているだろう。

どこか、休める場所が必要だ。でも、いったいどこに？

休んでいる間に襲撃されるなんてことは珍しくもない。

いつも振り返りにしてやったが。

歩いている間に、だんだんと意識は朦朧としてきた。

そして、ついに彼の意識は飛んで行ってしまった。

「なんて酷い怪我でしょうか。」

これはいけません。早く治療しないと……。

みたまさん、少し待ってください」

「……わかったわよ」

目が覚めると、彼は横に寝かされていた。

体に巻かれた包帯や、消毒薬の匂い……。

誰かが治療してくれたのは確かだった。

「あっ……良かった、目を覚ましてくれましたね」

感覚でわかるのだが、治療してくれたのは転生者だった。

だが、彼からは何の悪意も感じられなかった。

一言で言うなら、聖者であろうか？

すっかり忘れていた優しさが彼からは感じられた。

……それとは正反対に、彼と一緒にいた少女の瞳からは憎悪しか感じられなかった。

転生者狩りの特権にあらゆる作品のデータベースを見れるというものがある。

その少女の名前は八雲みただ。

どうして彼女の瞳に憎悪が籠っているのかも、知っていた。

しかし、聖者である転生者にすら気を許していなかったのだ。

まあ、わからなくもない。憎悪というものはそう簡単には溶けるものではないからだ。

「僕は里見優心と言います！君の名前はなんていいますか？」

「……名前、そんなもんはとうの昔に捨てたな」

優心のほうも彼が転生者だということがわかり、

それも只ならぬ事情があると察してくれた。

「じゃあ、九郎というのはどうですか!」

これは後の話だが、夜寝ている間にようやく理解できた。

九郎というのは、爪Cia_wが由来だったのだ。

「九郎・・・いいかもな」

こうして九郎の新しい人生が始まった。

彼は優心たちに付いてゆき、ピユエラケアに身を寄せた。

みたまが修行をしている間、彼は色々と手伝いをこなした。

なんとなしに、リヴィア・メデイロスに引き取られることも決定してしまった。

「リヴィアさん、どうか一つだけでもいいんです。

光の種シナリオには、どうしても幻想体が必要で、

その幻想体を作るためにはグリーンフシードが必要なんです」

「・・・わかった。アンタのシナリオに賭けてみるわ」

優心がピユエラケアを訪れたのは、光の種シナリオとやらのためらしい。

だが、原作ではそれはアンジェラというAIに崩されたのだ。

「・・・優心、本当に成功できるのか?」

もし、裏切りとかがあったら図書館だぞ?」

「大丈夫ですよ。ゼーンぶ、僕一人でやるので」

「なるほど、それは成功しそうだな。

・・・それで、みたまはどういう役割なんだ？」

「とくにどういう役割というわけでもないんですが・・・

そうですね、言うなれば外から見届けてもらいたいと」

彼は腕時計みたいなものを取り出した。

「これで施設内で経過した時間を見ることができるとです。

みたまさんたちには、ぜひ外から見てもらいたいです。

そして、そのあとの世界に森が出来るのも見守ってもらいたいですね」

「そ、そうか」

「あと、足りないグリーンフィードの転送とかもですね」

そこで、今度はみたまに聞いてみた。

彼女は九郎には憎悪の瞳を向けなくなっていたから話しやすかった。

優心に対してはどういうわけか相変わらず憎悪を向けていたが。

「みたまさん！」

「あら、どうしたのかしら？」

「みたまさんは、優心さんのことをどう思ってるんですか？」

「・・・」

彼女の表情は、まさしく無だった。

転生者狩りをしてきた彼でも、こんな表情は見たことがなかった。

「あの、俺、何かマズいこと聞いちやいましたか？」

「……あなたは優心のことをどう思ってるの？」

「……聖者、ですかね」

それが正直な感想だった。

彼は身を光にしてまでも、この世界を救おうとしているのだ。

そんな転生者は今まで見たことがなかった。

「……そう、あなたも変わらないのね」

みたまはそう言つて、その場から立ち去つた。

そして、別れの日がやってきた。

「九郎さん、渡したいものがあります」

彼は昔の朝鮮人が書いた詩集を渡した。

空と風と星と詩……優しい心のこもった詩集だった。

それから二年の月日が流れた。

その間に、また転生者に出会つた。

彼はかつての九郎と同じように憎悪に囚われていた。

そして、彼もまた優心と出会っていたのだ。

改めて優心の偉大さを思い知った。

そして二年目・・・光が世界を包んだ。

ゆつくりと前に向かって生きていける気がした。

・・・脳裏に、みたまの表情がよぎった。

彼女はまさか・・・そのまさかだった。

世界は闇に包まれ、そして人々がねじれ始めた。

そして、今、彼は神浜市の大地に立っていた。

これから何が起ころのかはわからない。

だが、大事なものはピュエラケアの面々を守ること。

彼女たちもまた恩人なのだから。

そして、みたまと話をしなくては。

・・・もちろん、田中鉄雄とかいう人間の手助けも。

彼は不思議な人間だ。転生者なのに転生者ではないのだ。

同じ世界で死に、同じ世界で生まれ変わったのだから。

だからなのか、精神も真つ当なものだ。

優心もそんな彼を信頼して、後継者に選んだに違いない。

最初の第一声

優心の知り合いが現れて、和泉とみたまとの話し合いの場を整えてくれた。彼は九郎といつて、優心に新しい人生を与えてもらったそうだ。

話がずいぶんと急だったが、すぐに承諾した。

一回は話し合うべきだと思つたからだ。

本当はその二人の顔をぶん殴つてやりたいくらいだったが。

何かあつた時のために、先にほむらと華宵の二人を行かせ、

自分は夏目書房をきつちりと掃除した。

もしかすると、これが最後かもしれないからだ。

良い意味であつたとしても、悪い意味であつたとしても。

「すまない、遅れてしまった」

「いや、大丈夫だ。さあ、行こうか」

九郎に案内されたのは中央区の廃墟。

そこにトレーラーが停まつていて、

その近くにほむら、華宵、九郎の仲間たち、和泉とみたまが椅子に座っていた。

さて、二人の顔を見ると改めて怒りがこみ上げてきた。

この二人がしでかさなければ、こうしていることもなかったからだ。

壱、優心の計画を壊してまで神浜を壊したかったのか？この裏切り女

貳、優心は神浜のために身を捧げたというのに・・・どうして台無しにしたんだ？

第一声は喧嘩腰でいくべきか？

こういつた対話では弱腰はいけないからだ。

チエンバレンがいい例だ。

だが、無理に喧嘩腰というのもよくないのではないか？

参、お互い、干渉せずに仲良くやろうや

なるほど、両者ともに互いの行為に無関心であれば紛争は起こらないだろう。

だが、無関心が本当にいいのか、なぜか不安になつてきた。

愛の反対は無関心ともいうからだ。優心は常に関心を持っていたのだから。

どんなに惨めな状況に置かれた人間にも、彼は手を差し伸べたのだ。

肆、（・・・第一声は別の奴に任せるか）

そうすれば、鉄雄にはなかった冴えた方法を誰か言い出してくれるかもしれない。

・・・でも、やはり自分が何か言つたほうが良いような気がした。

たとえば・・・

伍、とりあえず戦力をかき集めて、皆で光の木を完成させよう

そもそも、現在の神浜市の状況は明らかに優心の望んだものではなかったはずだ。必要なのは協調なのではないだろうか？

確かに、色々とおつたのは確かだ。二木市の魔法少女も難色を示すだろう。

だが、誰かがこの円環を断ち切らなくてはいけない。そんな気もするのだ。

どちらにせよ、どんな選択をしたところで、それを受け入れなくてはいけない。

人生は選択の連続だ。そして、どんな選択でも何かの不都合は発生するのだ。

じゃあ、できる限り後悔の残らない選択をしてやろうじゃないか。

果てしなき流れの果てに

壹・優心の計画を壊してまで神浜を壊したかったのか？この裏切り女

八雲みたまは里見優心を憎んでいた。

最初はそんなことなかったのだ。

小学生の時から、ずっと彼のことがむしろ好きだったのかも知れない。

妹にも優しく、十七夜にも臆することなく対等に付き合えて、

そんな彼にどこか憧れを抱いていたに違いない。

水名女学園から帰ってきた彼女のこと、庇ってくれた。

そんな彼に違和感を抱いたのは、その数時間後のことだった。

彼はある計画書を見せてくれたのだ。

それは途方もない、それでいて説得力のあるシナリオだった。

思えば、小学生の時から彼は精神病に関心を持っていた。

そんな彼らしいシナリオといえば、それで終わっただろう。

(・・・本当にあいつらなんて救う必要があるの？)

彼女は東の人間も西の人間も嫌いだった。

信頼できるのは、妹のみかげと十七夜と、彼だけだった。そんなみたまの様子を察したのか、彼は続けた。

「これは個を取り戻すためのシナリオなんです。

病気の人がいるならば、僕はその人たちを救わなければなりません。それが僕の使命です。誰かがやらなくちゃいけないんです」

みたまはふと違和感を抱いた。

彼は救うといったが、その表情は一瞬だけ切羽詰まったものに見えた。

それが救う者の表情とはとてもじゃないが思えなかった。

キユウベえと契約した後、彼の秘密の研究所に訪れたことがある。

その時、ガラスケースに収容された腕を見つけた。

「・・・ねえ、これ、誰の腕？」

「あつ、僕の腕ですよ。僕の方が釣瓶適性があつたんです。

とりあえず、腕だけを釣瓶にしました。

安心してください、薬ですぐに生やしたんです。

あとは、グリーンフシードも混ぜれば完成です」

違和感はいっそう強くなった。

普段の彼だったら、間違いなく全身を捧げていたはずだ。

だが、彼はそうしなかった。まるで、死にたくないかのよう

に。二回目の訪問時に、あるハングルの走り書きを見つけた。

救われたい

違和感は急に嫌悪に変わった。

最初はなぜなのか、みたまにもわからなかった。

だが、それがだんだんと明確になってきた。

「ねえ、このポッドは何かしら？」

「ブライト／ザーションヒト科複製機です」

シナリオによると、この機械で職員とやらを量産するらしい。

そう、彼は量産と言ったのだ。人をモノ扱いするかのよう

に。神浜市の人間に個を取り戻したいと言っておきながら、優心は逆のことをしようとし

た。

嫌悪はやがて、憎悪に変わっていく。

師匠であるリヴィアでさえも、唆されてグリーンフシードを渡した。

九郎と名付けられた青年も、彼を慕っていた。

「聖者」

そう、優心に関わった人間は異口同音にこう言うのだ。

彼らはあの男の本性にまったく気づけなかった。

あの男は、ただ自分が救われたいというだけで行動しているのだ。

そのためだけに、地下に無限地獄を作り上げ、量産した人間を死に追いやろうとしていた。

気持ち悪さを感じた。人類の救済をいけしやあしやあとのたまう男に。

その日はやってきた。優心はみたまたちにデジタル式腕時計を渡した。

その腕時計は施設内で過ぎた時間を表示してくれるのだ。

自分が救われるのをこうやってでも見守ってもらいたいということだろう。

いずれ地上に上がってくるだろう敷地を守るのは村宮という男だ。

彼もまた優心を崇めているようなタイプだった。

何という皮肉であろうか。

個を取り戻すとのたまう男の周りには、

彼を信じることはばかりで個性がない人間だけだった。

それから二年の月日が流れた。

TT2プロトコルとやらで、施設内は悠久の時間が流れた。

その間に、いったいどれだけの人間が死んでしまったのか？

考えることだけでも、おぞましかった。

地上が施設に上がった時、それを台無しにするという考えは自然と芽生えた。暖かい光の中でも、彼女の憎悪は溶けなかった。

哀れな村宮、彼は弱い武器しか与えてもらってなかったのだ。

ある意味、優心の自己本位性の被害者であろう。

十七夜も意図はわからないが、協力してくれた。

そこから、二人で大いなる力を得ることができた。

みたまの望みはただ一つ、神浜市を滅ぼし、優心の夢を地上に叩きつけること。

「・・・あなたのような薄汚い裏切り者には、それ相応の罰が待っているでしょう」
常盤ななかは死に際にそう言った。

裏切り者で結構。裏切られるだけのことを男はしでかしたのだ。

そして、田中鉄雄という目の前の男もみたまを裏切り者と呼んだ。

「じゃあ、アンタはあの男の本性を知ってるっていうの？」

みたまはすらすらと優心の悪行を言うことができた。

だが、男はそれに耳を貸すことはなかった。

「それでも、アンタは優心を信じるべきだった・・・！」

あいつの正気と熱情で、人類は前に進めたはずなのに・・・！」

正気も熱情も、優心にはなかったはずだ。

彼は刀を抜いて、みたまも変身した。

もはや、話し合いなど最初から決裂していたのだ。

「……結果はみたまの勝利だったが、男を逃がしてしまった。

九郎たちも逃げてしまった。もはや、みたまをどうすることもできないと悟ったのだ。

そして、悟ったのはみたまも同じだったのだ。

もう、自分には力が十分すぎると言えるくらいにはあることがわかった。

「……十七夜、私は神浜を滅ぼすわ」

「そうか……止めはしない」



その日から、神浜は災厄に包まれた。

強力になりすぎたみたまの因果は、みかげにもどうにもできなかつた。

魔法少女たちは抵抗する者、逃げる者にわかれた。

「……レナちゃんとかえでちゃんはどうしたの？」

「逃がしたさ……もう少し早く気づけていたら」

「気に病む必要はないわ、ももこ。これが私の選択なんだから」

ももこを中心とした抵抗勢力は、全員この手で殺した。

正確には、本にしたというべきか？

調整という能力が別の方向に昇華したのか・・・。

殺すたびに、多くの本を読むことができた。

かつて十七夜が個を失っていると批判した神浜市民にも個はあったのだ。

こんな単純なことに、十七夜も優心も、そしてみたま自身も気づけなかった。



図書館は神浜市を中心に、日本を浸蝕していった。

それは人を殺しながら、成長を続けていった。

十三年間、その星はどの星よりも世界を照らし続けた。

図書館の氾濫を止めることなど誰にもできなかつた。



「・・・ようやく会うことができましたね、司書さん」

玉座に座るみたまの前に現れたのは一人の少年だった。

ブツクハンターの一人であろう。

彼が腰に差している刀はどこかで見ることがあった。

・・・十三年前、鉄雄が抜いた刀だ。

「あなたは鉄雄という男を知ってるかしら？」

「ええ、知っているも何も師匠の一人でしたから。」

今も、中国の方でフィクサーたちの育成に励んでると思います」

「・・・そう」

少年の髪に、白い花を模した髪飾りが留められていた。

その髪飾りも見ることがあった。それも十三年前に。

その髪飾りをじっと見つめていることに、少年も気が付いた。

「・・・母を知っているんですね」

「あら、あなた夏目かこの娘だったのね」

「血は繋がっていませんが、僕は母に育ててもらいました。」

母さんが読み聞かせてくれた本のごとは昨日のように覚えています。

本はどこかに消えてしまい、この髪飾りがお母さんの唯一の形見となりました」

みたまは覚えている。

少年の付けているアクセサリーがももこの推しのアイドルのグッズだったことを。おおかた、レナが彼に与えたのであろう。

みたまは覚えている。

少年の剣の構え方が、竜城明日香の構え方であるということ。

師匠は何人もいたようだ。

みたまは覚えている……。

みたまは覚えている……。

みたまは覚えている……。

「……あなたは多くの人に愛されて育ったのね」

「ええ、重くて抱えきれないほどの愛をもらいました。」

……僕は普通の人間とは少し違うようなんです。

体内に普通はありえないはずの器官があるんです。

それはねじれとはまた違ったもので、因果に対し微々たる干渉ができます。

九郎おじさんはそれをリンカーコアとか呼んでいましたが。

それでも、そんな僕を皆は愛してくれました。

最初に愛を与えてくれたのは、母でした。

次元の歪みから現れたとかいう赤ん坊を拾ってくれたんです。

何もかもが厳しい状態だったのに、皆が母と僕を助けてくれました」

「・・・あなたは愛されて育ってきたのね」

「そうみたいですね。そして、今度は僕が愛を与える番が回ってきたようなんです」
彼は指輪を撫でた。

「こんな時に言うのもなんですが、みかげさんを僕にください」

「・・・あなた、十三歳のように見えるんだけど？」

「そうですが、何か？」

どっかの誰かさんがあーだこーだしてくれたいで、

世界人口は減少傾向なんですよ？

ネジレやら図書館を中心とした異常気象の発生やら・・・。

年齢が下げられるのも、無理はありませんよ」

あれから十三年。みかげは二十四歳のはずだ。

年齢差が十年以上もあるのだ。

「義姉さん」

「あなたに義姉さんって呼ばれる筋合いはないわよ」

「もし僕が十八歳になるまで待ったら、どうなるか考えてください。」

僕はみかげさんが何才だろうと気にしません」

24+6、結果は至極簡単だ。巴マミになる。

いや、まだ彼女は二十八歳だが、惨状は図書館でも耳に届く。

「・・・仕方ないわね。泣かしたら許さないわよ」

「ありがたい幸せです」

もう、何も言うことはなかった。

みたまも疲れたのだ。

永遠に止むことのない復讐に。

もはや、復讐の対象たる神浜市が消滅したのに。

それでも続く殺戮に。

「・・・私は人間の何たるかを知ったわ」

「そうでしょうね・・・」

そして、僕はあなたのことを知っています。

おやすみなさい、またみかげさんと一緒に来ますね」

「・・・眠らせてくれてありがとうね」



いくら明るく輝く星でも霞みゆく。
他の星と同じように
いつか人間によつて沈むだけだ。

今夜も星が
風をかすめるように

せめて、人間らしく

式：優心は神浜のために身を捧げたというのに・・・どうして台無しにしたんだ？

里見優心は慈悲と寛容のなんたるかを知っていた人間だった。

和泉十七夜はそんな彼に憧れを抱いていたのだろう。

そして、同時にどこか反発もしていたのだろう。

彼女が自らの意に反する者を認めようとしなないのはその現れだ。

彼と同じくらい強くあろうとして、別の道に進んだのだろう。

そんな彼の弱さというものを知ったのは、中等部の時だったか？

魔法少女になる前の話だ。

寒い冬の夜、彼と一緒に下校していたのだ。

ほのあかい額に冷たい月が沁み、優心の顔は悲しい顔だった。

「・・・優心、お前は将来の夢はどうするつもりだ？」

歩みを止めて、そつと手を握りながら

「医者と書きましたが・・・本当は別の答えがあるんです」

「ほう？」

「たぶん、笑うと思いますよ」

「構わん、言ってみてくれ」

彼の白い吐息が大気と混ざる。

「人になりたいんです」

まことに未熟な答えだった。

何食わぬ顔で手を放し、彼の顔をまた覗いてみる。

冷たい月が、ほのあかい額に濡れ、優心の顔は悲しい絵だった。

・・・魔法少女になってから、ますます彼のそういつた一面を知ることができた。

ある日、秘密の研究所に訪れると彼は腕を切断していた。

「貴様！何をしている！」

彼を取り押さえて、すぐに止血した。

「・・・僕が釣瓶の適応者だったんです」

彼は残った方の腕で小さな機械を指差した。

「馬鹿者！そんなことで腕を切り落としたというのか!？」

「安心してください、すぐに生やせるので」

彼の横面を殴った。

「そんな問題ではない！自分すら大切にできない者が、

人の病気を治すことなど不可能だと思え！」

「……僕には大切にされる資格なんて最初からないんですよ。今までも、これからもそうでしょうね」

もう一発殴った。

「……ここにいます！お前を大切に思う者が、ここにいます！」

「……」

魔法少女姿に変身して、彼の心を覗いた。

……信じられないが、優心は別の世界の人間だった。

財閥の圧政下にある韓国で、誰にも気にかげられない身分で、

それでなお、善く生きようとしていたのだ。

そんな彼が出会ったゲームが、人生を変えたのだ。

彼はいつからか救われたいと考えるようになった。

この世界に生まれ落ちたのは……ある意味では偶然だった。

自らを救うために、とりあえずこの世界を選んだのだ。

もし、他に選択肢がもつとあつたならば、この世界にはいなかっただろう。

彼の心は今この瞬間にも悲鳴を上げていた。

救われたい、救われたい、救われたい、救われたい……。

自分は救われた。しかし、自分だけ救われるのではない。だから、他人も救おうとしているのだと、ようやく十七夜は理解した。

だが、その過程で行われることはあまりにもおぞましいことだった。

人間を職員と称して量産し、コギトによって幻想体を作り上げ、永遠の地獄を繰り返すその結果出来上がった光の種によって人間は救われるという。

そんなことがあつてたまるか。

そんな歪んだ救済で、神浜市の東西問題は確かに解決するだろう。

ただ、別の問題が浮かび上がるだけのこと。

十七夜は優心を止めたかった。

ドアをノックする音なんて聞きたくなかった。開けると、彼がそこにいるからだ。

そして、あまりにも極端すぎるシナリオについて話し出す。

無謀なのに、どうしても説得されてしまう。

ついに彼は旅立った。狂気に満ちた永遠のシナリオに。

いずれ光の木が立つであろう場所は村宮という人間が守ることになった。

彼は多くの人間と同じように、優心を聖者か何かだと思っていた。

違う、彼は人間なのだ。どうしようもないくらい、人間なのだ。

人になりたいんです

彼をつかんで、ゆさぶってやりたかった。

お前はもう人間だと、救われたいと思うだけの人間だと。

572897623098502475018590176308762

二年間に過ぎ去った数百万年の間に死んだ職員の数だ。

人間になりたいという望みのために、彼は人間ではなくなつた。

誰も優心を人間として見ていなかった。

聖人としか思つていなかったのだ。本当の彼の苦しみも知らずに。

だからこそ、光の木を打ち壊したのだ。

村宮には可哀想なことをしたが、しょうがない。

せめて、優心には少しでも人間でいてほしかった。光になつて欲しくなかつた。

だが、光の種シナリオが終わつた後も、彼の人間性を認めない者は多かつた。

おそらく、目の前の田中鉄雄とやらもそんな人種だろう。

「……貴様のような者たちが、優心を苦しめていたのだ！」

本当のアイツを、誰も見ようとしていなかったのだ！」

そこからなし崩し的に戦いは始まつた。

力はこつちの方があるというのに、鉄雄は善戦した。

そして、最終的には逃げられてしまつた。

もうどうでもよかった。あれは放っておいてもいい。ただ、今の自分に十分すぎるくらい力があることならわかった。



神浜市は滅ぼされた。

炎と叫びの混じり合う地獄。

だが、この地獄が終われば、人々は再び立ち上がるだろう。

そして、今度こそ東西関係なく手を取り合う。

歴史の歪みを修正するのに、光の種などいらぬ。

いや、あつてはならなかったのだ。



少女の死体が丘の上に横たわっていた。

彼女は多くの傷を負っていた。

宿敵だった者の槍によって、

長い歴史を誇った中華料理屋の娘の扇によって、
傭兵を名乗っていた少女のハンマーによって、

家族を求めていた少女の盾によって、

妹を探しにやってきた少女の矢によって、

その妹の武器である凧によって、

新人魔法少女を助けてきた少女の大剣によって、

素直ではなかったが思いやる心を持っていた少女によって、

自然と動物を愛していた少女の杖によって、

同じ地区の出身であった少女のカメラによって、

自分の弟子でもあった姉妹の笛によって、

中央区をまとめていた少女の化学薬品によって、

本を愛し仲間を愛していた少女の葉によって、

騎士を目指していた少女のレイピアによって、

刀を愛しアイドルであった少女のマイクによって、

水名という街を愛していた少女の鉛筆によって、

神浜で生まれ育った魔法少女たちによって。

「いんなの……いんなの酷すぎるの……!」

ある少女が遺体を埋葬した。

墓標は立てなかつた。

掘り返されて、さらなる報復をされるかもしれないからだ。

その代わり、丘の上に文字を刻んで、また土をかけた。

意味はないかもしれないが、せめてもの想いだつた。

ですが冬が過ぎ私の星にも春がくれば

墓の上にも緑の芝草が萌えるように

私の名がうずもっている丘の上にも

誇るかのように草が一面生い茂るでありますよう

無関心の代償

参・お互い、干渉せずに仲良くやろうや

善意と無関心、それにより人類は平和を得てきたという。

もはや指導者がなんと言おうと、民衆は武器をとらなくなったからだ。

無関心は確かに平和を生むのかもしれない。

だが、三体Ⅱ黒暗森林において主人公の羅輯は言った。

沈黙は最大の軽蔑だ

愛の反対は無関心であり、無関心とは一種の沈黙だ。

そして、沈黙は最大の軽蔑なのであった。

鉄雄たちは神浜の魔法少女たちの戦いに無関心を貫いていた。

十七夜とみたまもそれで何とか納得してくれた。

九郎が強く説得してくれたのも大きかったが。

そのためにかことも二木市の魔法少女とも縁を切った。

ただネジレを倒し、光の種を淡々と集めていった。

魔法少女たちがどんなに争い、そして傷つこうと……。

彼らはまったくもって、神浜の涙に無関心だった。

そして、ついに光の木を立てることに成功した。

それは無関心とは反対の概念を世界中に降り注がせた。

人類は、前を向く勇気を得ることができたのだ。

そして・・・魔法少女は関心を持った。自分たちを無視した存在に。

無関心の反対は愛であると同時に関心だ。

その中には、憎悪も含まれていた・・・。



あれから4年の月日が流れた。

鉄雄も今では立派な大学生となった。

光の影響で、彼もまたトラウマに耐えられるようになった。

そう、前世と同じ大学・・・神浜市立大学に合格したのだ。

そして、ある男と再会することができた。

「へえ、お前もこの大学だったのか。見滝原にも大学はあるだろうに」

「やっぱり、前世と同じ大学がいいんですよ。村宮先輩」

「敬語じゃなくっていいよ」

村宮、優心の従者だった男だ。

彼は優心から転生者という存在について教えてもらっていらしい。

「じゃあお言葉に甘えて・・・人間不信は治ったのか？」

「まあな・・・ちかがいたおかげさ」

「ちか？」

「青葉ちか・・・その子も人間不信だったんだ。

そして、北養区の山中に住むようになったというか・・・。

最初はお互い無視していたんだけど、いつの間にか話すようになって・・・。

そうだ、今度遊びに来いよ。いい感じの小屋を二人で作ったんだから」

「そうだな、そうさせてもらうよ」

春の穏やかな空気にキャンパスは包まれていた。

蘇るのは、前世の学生運動の記憶。

今では、誰も政治なんてそこまで気にしていなかった。

無関心なのだ。でも、悪い意味ではなかった。

要は何か主義とか壮大な主張になってないだけの話だ。

もうそんなものになびく必要はなかった。誰もが自分を愛していたから。

村宮と別れて、キャンパス内にある散策道を歩いた。

1970年代にはなかったはずだが……何かの記憶を消そうとしているかのよう。うららかな光に照らされると、一人の女性と出会った。

彼女は密生しているクローバーから四葉のクローバーを探しているようだった。

「うん？君も探してみる？」

説明会とかは終わったので、時間はたつぷりと余っていた。

「じゃあ、ちよつと探してみますね」

「敬語じゃなくてもいいよ、同じ一年生でしょ？」

とりあえず、二人で四葉のクローバーを探した。

でも、意外とそういうのは見つけづらかった。

ようやく一つ発見できて、それを女性に渡した。

「えっ、いいの？」

「いいよ、俺の親友しんゆうだったらそうしただろうし」

あの光を受けてから、どこか行動規範が優心を意識したものになった。

それもあって、後悔することがなぜか増えた。

どうして、魔法少女と協力しなかったのだろうかと。

魔法少女といえば、ソウルジエムは完全に濁らなくなった。

全世界の魔法少女が救済されたのだ。

神浜には自動浄化システムとやらがあったそうだが、それもいらなくなったらしい。らしい、というのはすべてまどかからの伝聞だったからだ。

今に至るまで、神浜とは一切縁がなかったからだ。

それでも、鉄雄は瞳を持っていた。鎖を断ち切り、恐怖に向き合う瞳を。

だからこそ、ようやくここまで来ることができた。

「・・・その親友さんって、私の知ってる人に似てるね」

「たぶん、同じ奴だと思うぞ。こんな本持ってたろ？」

例の詩集を懐から取り出す。

「うんうん！その人ね、色々なことにすっごく関心を持ってたんだ」

「だろ？うな・・・じゃないと、あんな夢は持てなかった」

二人は散策道を歩き始める。

「みんなの病気を治すって夢？」

「そうそう・・・そんな壮大な夢だ。

よく考えたら無謀なのに、俺は惹かれたんだ」

「私も同じ感じだったな」

「それでさ、アイツはもしものことがあったら、

俺が後を引き継いでほしいって言ってきたんだ。でも、上手くはいかなかったな。

「アイツだったら、ちゃんと関心を持ってたから」
「・・・後悔してるの？」

「してるさ・・・なあ、魔法少女なんだから？」

「・・・うん」

直感でわかるようになったのだ。

神浜にいたおかげだからなのか？

「みんな、俺のことどう思ってたんだ？」

「ネジレ探偵だったってわかったら・・・」

多分、あまりよくない目に遭うと思う」

散策道が重い空気に包まれる。

「なら、もうすぐ終わりだな。

・・・ああつ、くそ。華宵の奴、

一人旅に出たのはそういうことだったのか」

彼女はこのことを見越して、逃げたのだ。

今まで、気づくことができなかった。

「・・・観鳥令という魔法少女が死んでも、

俺たちは一切の無関心を貫いてしまった。

それどころか、彼女の死を・・・無意味にしてしまった」

「・・・みんな、そのことでキミのこと恨んでる。

あの日の光のせいで、今までの戦いが無意味になっちゃったから。

二木市の魔法少女たちにも会わないほうが・・・」

「そうか。それは・・・最悪だな」

散策道の果てには、記念碑があつた。

それは学生紛争を忘却するための記念碑だつた。

あの日、一人の学生が命を落としたから。

正気と融和と自由主義を説いた学生の血をぬぐうための記念碑・・・。

「ここがいいな。一人にしてくれ」

「・・・だめだよ」

女性は鉄雄の意図を察したようだ。

「・・・お願いだ」

鉄雄の意思は固かつた。

「・・・わかつた」

「最後に、名前を覚えてくれないか？」

「・・・相野みと」

「そうか、俺は田中鉄雄だ」

彼女はゆつくりとその場を後にした。

鉄雄は三十分待った。そして、その時はやってきた。

「・・・遅かったな」

「・・・」

現れた魔法少女は鉄雄に殺意を向けていた。

「・・・レナちゃん、といってもあなたにはわからないよね」

「ああ、知らないな。知っておけばよかった」

「じゃあ、朗生って子は覚えてる？」

「ああ、覚えてるさ。ひどく印象に残ってたから」

彼は殺されたのだ。そして、それを目撃していた。

らんかに殺されたのだ。そして、鉄雄はそれを見逃した。

魔法少女のやることに無関心を貫くためだった。

「レナちゃんはその子の幼馴染だったの」

「・・・あいつは死を望んでいた」

「だとしても……！レナちゃんはそれを望んでなかった……！」

ねえ、あの光のあと、レナちゃんがどうしたか……」

彼女の表情は一気に暗くなった。

「……後を追ったのか」

「みんな、あなたのことを憎んでる。

どれだけ苦しんでも、あなたは無視した。

朗生くんって子も、あなたが無視したんだよ……！」

だから……せめて、その苦しみの一部くらいは……！」

「……お前の名前は？」

「秋野かえで……今さら関心持っても、遅いよ……！」

かこちゃんも、みんな、みんな、苦しんだのに……！」

どうして、あるとき、私たちが気にならなかったの……！」

どうして、助けてくれなかったの……！」

どうして、何もかもを無意味にしたの……！」

ああ、そうか。鉄雄はようやく思い出した。

前世の記憶を照らし合わせて、ようやく気がついた。

ここは、前世で自分が死んだ場所だった。

前世の自分も無関心だった。

そんな自分が突然、傷つけあっていた学生たちの前で演説した。

そして、演説を聞いた彼らは激昂したのだ。

自分たちの理論をけなされたからではない。

「どうしてこうなるまで手を差し伸べてくれなかったんだ！」

こんなに俺たちが傷つけあつたのに、どうして今まで無視してたんだ！」

自分は何も変わっていなかったのだ。

そして、前世と同じように、ある祈りを心の中で捧げた。



「ただいま、ちか」

「お帰りなさい、村宮くん」

「今日、昔の知り合いに出会ったよ」

「へえ、そうなんだ」

「今度さ、ここに誘おうと思うんだ」

「うん、いいと思うよ」

この二人の絆は強かった。

もちろん、時に喧嘩することもある。

だが、それでも乗り越えることができた。

お互いに、関心を持つていたからだ。

関心を向けるというのは、憎悪を向けるだけではなく、愛を向けることでもあるのだから。

関心を持つというのは、最大の尊敬といえるのだ。

村宮はカレンダーをチェックして、友を誘える日を確認した。

もう、その友はこの世にいないということも知らずに。

神さま、ぼくの死ぬ日が美しく清らかであるようにして下さい

ラ・フォンテーヌの寓話フアーブルのよき農夫のように

Salvation Of Yakult

肆（・・・第一声は別の奴に任せるか）

華宵がおもむろに立ち上がって、そして言った。

「そもそも問題があるわ・・・それは、皆がキレやすいことよ」

全員、彼女が何を言いたいのかわからなかった。

「よく考えてみなさい。魔法少女同士で互いに争う理由を。

グリーンシード？確かにそれもあるわね。

でもね、いくら命がかかっているからって、喧嘩っ早いと思うのよ」

そこで彼女は懐から・・・ヤクルトを取り出した。

ヤクルトは、京都帝国大学医学部で微生物を研究していた医学博士代田稔が、1930年（昭和5年）に乳酸菌の一種であるラクトバチルス・カゼイ・シロタ株（L. カゼイ YIT9029）の強化・培養に成功し、1935年（昭和10年）に福岡県福岡市で代田保護菌研究所のもとに飲料として製造・販売を開始したことに始まる。

「ヤクルト」（Yakult）という商品名は、エスペラント語でヨーグルトを意味する

「ヤフルト」(Jahurto)を元にした造語である。

日本国内でヤクルトの販売量が最多を記録したのは1972年(昭和47年)で、1日平均で1,600万本を売り上げた。これは約7人に1人が毎日ヤクルトを飲んでいた計算になる。2006年(平成18年)4月時点では、オリジナルのヤクルトだけで1日約300万本、ファミリー商品を含めると約900万本が販売されている

以上、Wikipediaからの引用である。

まあ、とにかくおいしい乳酸菌飲料ということだ。

「皆、乳酸菌が足りないからキレやすいのよー」

その場にいた誰もが啞然とした。

鉄雄は後悔した。こんなのに第一声を任せてしまった。

よくよく思い出すと、これは確かに残念なことが多すぎた。

かこでさえも何もするなというくらいなのだから。

「・・・馬鹿馬鹿しいわ」

そう言っつてリヴィアはコーヒーを飲んだ。

だが、彼女は違和感を感じた。熱くないし、なめらかな甘さ。

しかも、コップではなかった。プラスチックだった。

そう、空っぽになったヤクルトの容器だった。

「……ア、アンタ、やりやがったな」

リヴィアは机に倒れ伏すと、すぐに起き上がった。

彼女の瞳はとも澄んでいて、顔は晴れ晴れとしていた。

「……やったことは最悪やけど、いい気分や」

「そうでしょお・さあ、これからはヤクルトの時代よー」

彼女の言いたいことはよくわかった。

確かにリヴィア・メデイロスの精神は改善したのだろう。

ヤクルトは偉大かもしれないが、何か違う。

そういうわけで、その場にいた者たちは何がなんでも抵抗した。

驚くべきことに、リヴィアの次に餌食になったのはほむらだった。

華宵はどういう能力を使ったのかはわからないが、時を巻き戻したのだ。

そういうわけで時間停止で逃げたほむらにヤクルトをぶち込んだのだ。

恐ろしいのは、ヤクルトを飲んだ者は他の者にもヤクルトを飲ませようとする事。

リヴィア、ほむら、華宵の連携プレイによって篠目ヨヅルが人質に取られた。

九郎はそれに屈し、自らヤクルトを飲んだのだ。

そして、そんな九郎の後に続いてヨヅルも自らヤクルトを飲んだ。

佐和月出里は状況をよく呑み込めずに、無邪気にヤクルトを飲んでしまっていた。残されたのは鉄雄、みたま、十七夜だった。

もはや、過去のことなどヤクルトに……いや、水に流さなくてはならなかった。

まずは目の前のヤクルトハザードを防ぐため、三人は共同戦線を結成した。

だが、みたまからやられてしまった。

いくら光の木の力を吸収したとはいえ、ヤクルトを飲んだものたちには無力だった。

次にやられたのは十七夜だった。みたまにソウルジェムを調整され、ヤクルトを飲ま

されたのだ。

必死に抵抗したのが鉄雄だった。

長い長い戦いが続いた。ビルだつて何軒か倒壊するくらいに。

だが、相手は究極Aliceになりつつある乙女Maiden、時を止める魔法少女、調整屋四人、

東をまとめてた魔法少女、そして……爪だ。

そういうわけで、彼は取り押さえられて、無理やり飲まされた。

そこからも長い抵抗が続いた。吐き出したり、根性で免疫をつけたり……。

だが、注射針で直接体内にヤクルトを注入されたことにより陥落した。

新しく始めよう。人も地球も健康も称えるためのヤクルトを



「・・・ななかさん、美雨さん、あきらさん」

かこはあれから引きこもりがちになっていた。

そんな彼女のもとに鉄雄が訪れた。

「ほら、ヤクルトだぞ。これ飲んで元気出せよ」

「その手には乗りませんよ???

顔が晴れ晴れしていると思ったら、飲んだんですね???

「すっげームカつくけど、心が意外と静かになるんだよな」

「ゲートは言いましたよ。」

傘を差さずに踊るものがないても許されるのが自由だつて。

そういうわけで、私は飲みませんよ」

「ところがどっこい、俺たちはFREEDOM IS YAKULTがスローガンだ」

「ヤクルトを飲んだ前提の自由ってことですか???

すると、鉄雄はかこの手をやさしく掴んだ。

そつと、ヤクルトも添えて。

「この前さ、こうやって俺を助けてくれたじゃん。」

ほら、新西区に行つたときにさ。トラウマに震えてた俺を。

今度はさ、俺がかこの力になりたいんだよ」

屈託のない表情で、鉄雄はそう言った。

どこか幼さを感じさせる瞳に吸い込まれそうだった。

なぜか頬が赤くなってしまふ。

「鉄雄さん……ええい！こうなつたら私も覚悟を決めます！」

こうしてかこも（色々な意味で）陥落した。



「ふゆう……」

「……飲まないわよ」

「ふゆう……」

「……どんなに見つめても、レナそんなの飲まないから！」

そこにももこが駆けつけてきた。

「レナ、これ飲んでくれたらさゆさゆのグッズあげるぞ！」

「そんな誘いにレナ絶対に騙されないんだから！」

「飲め」

「きゃあああああ！」



朗生は自らの人生に審判を下そうとしていた。

良い日だった。これ以上ないくらいに、穏やかな日だった。

「待ちなさいーい！」

・・・幼馴染が止めさせしなかったら。

「なんだよ、レナ。俺は今からケリを・・・」

「そんなのもう必要ないわよ！」

彼女はヤクルトを取り出した。

「よくわからないけど、これで解決しそうな気がするの！」

「・・・正気か？」

「今のアンタに言われたくないわよ！」

こうしてヤクルトをかけた戦いが始まった。

一方はジャステイティア、一方は魔法少女の槍。

勝負は互角であった。E・G・Oはそれほど強いのだ。

だが、予想外の攻撃で朗生はヤクルトを飲まされてしまった。そう、口移しだ。

「ぐむっ!!」

レナの舌が朗生の舌を絡めながら、ヤクルトを運んできた。だんだんと朗生は人間としての輪郭を取り戻しつつあった。

「……ぶはっ、これがレナの気持ちよ!」

「……本当によかったのか?」

「こんなこと、軽々しくやると思う?」

「……そうか、ありがとう。でも、俺はその気持ちには」

とりあえず、レナは彼をボコボコにして、自分の家の寝室に引きずっていった。

同じころ、村宮もちかに無理やり飲まされてしまった。

思春期の少年少女、暖かな心、そしてヤクルト。何も起こらないはずがなく……。



この状況を鑑み、シレンは合体することにした。

もちろん、ブレスレットと化したシレンも合体に加わった。

そして、研究所をみかづき荘の地下に展開した。

灯台下暗し、ということわざを利用するのだ。

そういうわけで、新生優心はこの事態を解決しようとした。

・・・が、運命はそれを許さなかった。

ブレスレットは他のシレンに合流するために瞬間移動したのだ。

だが、それによる魔力の動きとやらをとくに特定されてしまっていた。

天井が破壊された。攻め入ってきたのは、環いろはだった。

ご丁寧にヤクルトも持ってきていた。

「・・・僕は自由でありたいんです」

「そういつて、またどこかに行く気なんですか」

いろはは今にも泣きだしそうな顔だった。

泣きたいのは優心も同じだった。ヤクルトなんて飲みたくないのに。

「放っておいてください、いろはさん」

「いやです」

じりじりというはは距離を詰めて、じりじりと優心は後退する。

いろはが断固として意思を曲げないのは、優心はよく知っていた。

「・・・僕にとつて、それは救いじゃない」

「優心さん、言つていましたよね。道はいくらあつてもいいつて」

「だからといって、それを押し付けるのはよくないですよ」

「優心さん???ライトも、今回のシレンも、全部優心さんの押し付けですよね???」
壁に追い詰められたので、今度は壁に沿つて逃げた。

が、いろはは素早く先回りして、優心の隣にぴたつとくつついた。

そして、素早く抱きしめた。

「優心さんが昔から救われたいとか人になりたいとか思つてゐるの、知つてます。でも、もういいんです。優心さんはどこまでも人間なんです。

もし、優心さんを人間じゃないつていう人がいたら、私が許しません。

だから、もう休んでいいんです。ほら、これ飲んでください」

彼女はヤクルトの蓋を開けて、そつと優心の口につけた。

長い道の果てにたどり着いた安息であつた。

「ほら、一緒に帰ろう? 優心さん」

優心は差し伸べられた手を握つた。

いろはは彼を暖かな太陽の世界に連れ戻してくれた。

二人は芝生に寝転んで、笑つた。

その世界では、人も地球も健康も輝いていたのだ。

まったくもって、闇のない世界であった。

万事これでいいのだ。闘いは終わった。

彼は自分に対して勝利を取めたのだ。

彼は今、ヤクルトを愛していた。

我々が立ち返るべきは少年の笑顔だ。まっすぐで、輝いている。

その笑顔は、一日の終わりに世界は全としてあり、人間としての品格は、親の愛情と同じで、当然のごとく消えることなく存在しうる、

というゆるぎない信頼から生まれている。

その信頼の麗しさゆえに、われわれはオーウェルが、

あるいは我々自身までもが少しの間だけでも、こう誓う姿を想像することができる——その信頼が裏切られることのないように、やらなくてはならないことは何でもやるのだ、と。

Library Of Liberty

伍・とりあえず戦力をかき集めて、皆で光の木を完成させよう

その図書館は世界において最も偉大なる建造物であつた。

ランプと呼ばれる光源が実り、何億という本が収められている図書館……。
むかしむかしのことでした。

どのくらい昔かというと、心の光が薄れつつあつた時代です。

そんな昔の時代に、一人のお医者さんがおりました。

彼はこの世界の人間ではなく、彼もまた苦しんでいました。

そこでお医者さんは自分が救われ、そして皆も救われるために奔走しました。

一人の男が本を手を取つて、彼の子孫たちのために朗読を始めた。

子供たちの全員が羽根が生えていて、包帯を巻いていて、そして水色の髪だった。

全員が静かに自分たちの祖先である男の朗読を聞いていた。

彼は多くの友を得ました。その中には、英雄チヨルチンもいました。

しかし、ほとんどの友がお医者さんの苦しみに気づかなかつたのです。

三人の少女だけが、彼の苦しみに気づいていました。

一人はお医者さんを憎むがゆえに計画を彼のためだけにあると思ひ、一人はお医者さんを愛するが故に計画の実行を望みませんでした。

三人目の少女は、妹の病気でそれどころではありませんでした。

ともかくにも、お医者さんは計画に旅立ってしまいました。

いずれ光の塔が経つ場所を、守護騎士ムラミヤが二年間守り続けました。

その二年間で、お医者さんは多くの人間を作り、死なせてしまいました。

幻想体を閉じ込め、そして数百万年を繰り返したのです。

男は後になって、その事情を知ったのだ。

その二年間は男にとって悪夢のような復讐の日々だった。

男にとつても、優心にとつても悪夢だったに違いない。

とうとう、お医者さんはやり遂げました。

牢獄は地上に飛び出し、そして世界に光の種を蒔いたのです。

ですが、先ほどの二人の少女、ミータとカノギはそれを許しませんでした。

それぞれ理由は違いましたが、その光の木がおぞましいものだと思つたからです。

数百万年と、その間に死んだ人々のことを考えれば、少女たちの意見もつともです。

少女たちは特別な力を持っていて、守護騎士ムラミヤに勝ってしまいました。

そうして、世界は三日間の光の後に四日間の闇を迎えてしまいました。

やさしいハーブの音が響き渡る。

男は久しぶりに奏者に顔を見せようと思った。

闇が去ったあと、世界中に幼い不安定な種が蒔かれました。

その種のせいで、ネジレになってしまう人々が現れ始めました。

そこで立ち上がったのは、英雄チヨルチンです。

子供たちがごくりと唾をのんだ。

あの、英雄チヨルチンがいよいよ登場だ。

子供たちはかっこいい話を望んでいた。

ふだん、男は彼の残念な部分ばかり話すからだ。

酒癖が変な方向で悪く、すぐにインターナショナルを歌いだすとかそんな話ばかりだ。

いくら脚色されていても、たまにはかっこいい部分を聞きたかった。

だって、人は残念な部分だけでなく、いい部分も含めて人なのだから。

チヨルチンはこれまた特別な力を持つホムホムと共にカムイハマに向かいました。

なぜなら、そこがお医者さんの故郷であり、そして光の木が立った場所だからです。

二人は最初にムラミヤに会いました。その時、彼はひどく人間不信になっていました。

そんな彼からチヨルチンは情報を上手く聞き出して、ミータとカノギのことを知りまし

た。

彼はその名前を覚えておきました。そして、最初の戦いが彼を待っていました。

そこから繰り広げられたのは、鉄雄の後悔の一つである戦いだ。

後に、鉄雄はつむぎという少女にボコボコにされたそうだ。

子供たちはよくそんな話を聞かされるのだ。

でも、どんなにかっこいい人にも罪と後悔はある。

そんな教訓話でもあったから、子供たちは熱心に聞くのだ。

最凶の墮天使カシヨの・・・

男はつい笑ってしまった。

すると、近くの鏡から黒い羽根が飛んできた。

男も子供たちも全員伏せた。

「・・・あいつは少しやんちゃなんだ。話を続けよう」

気を取り直して、男は朗読を再開した。

三人はネイツメ書房に集まりました。

そこで、ケコと会いました。

チオルチンは彼女からミータとカノギについてさらに聞きました。

話を聞いて、チオルチンは頭にきました。

その足で、二人を殴りに行こうとしたのです。

賢きホームホームは彼を宥めて、時を待つことを説きました。

「よく考えたら、女を殴っちゃいけないって法律は今も昔もないよな。

やっぱり、殴りに行っておけばよかったかなあ・・・」

お酒を飲みながら鉄雄がそう言っていたのを、男は思い出した。

まあ、すぐに妻のかこにぼこぼこにされてしまったが。

「今月は飲まないって約束したはずですよね？」

じゃあ、鉄雄さんが泣くまで本の角で殴るのをやめませんかよ。

女が男を殴っちゃいけない法律もないんですからね」

「ぎゃあああああ！」

その時、男は大爆笑した。

もう一人の友、九郎と共に・・・。

「おや、帰りが遅いと思つたら・・・ここで道草食つてましたか」

「あつ・・・ヨヅル、これは違うんだ」

その友もまた、妻に引きずられていったが。

「ふゆう・・・レナちゃん家で待つてるのに、なにしてるの？」

「ちよつと来い。説教の時間だ」

・ ・ ・ 男自身は妻の親友二人に引きずられていったが。

そうこうしている間に、絵本はいよいよ名場面だ。

チオルチンは話し合いの最初に言いました。

できるかぎりの戦力を集めて、皆で光の木を立てよう、と。

思うことはあれど、彼はいったんミータとカノギを赦すことにしました。

そうすることによって、彼は復讐の円環を断ち切ったのです。

このことを知った時、男はチオルチンのことを羨ましいと思った。

彼は、別の選択をすることができたのだから。

こうして、新しい戦いが始まりました。

戦いといっても、敵はいませんでした。

まったくもって、新しい戦いだったのです。

チオルチンは特別な力を持つ少女たちに融和を呼びかけました。

最初の時こそ、少女たちはチオルチンを信頼できませんでした。

円環を断ち切るのは、どうしても勇気がいたからです。

でも、そんなときに立ち上がったのがイルオハという少女、

お医者さんの苦しみを知ってた三人目の少女です。

彼女が最初に円環を断ち切ったのを皮切りに、融和が始まったのです。

男も命拾いすることができた。

らんかに殺されそうだったが、結菜が止めてくれたのだ。

それから、男もまた彼女たちに加わった。

・・・まあ、最初は道德の再勉強だったが。

お医者さんが残した多くの発明や資料をもとに、チヨルチンは新しい方法を選びました。

来た人の人生を書き記していく図書館を立てたのです。

それは実に奇妙な方法であつた。

訪れた者は、とある機械で記憶を読み取られるのだ。

すると、それだけで本が完成し、光の種もどういふわけか手に入れられるのだ。

最初、九郎は人を本にするのかと勘違いしていたが。

「いや、だってラオルだとそうしてたし・・・」

まあ、誤解は解けたからよかつたのだが。

図書館はみるみるうちに成長していきましました。

しかし、天使はそれを許さなかつたのです。

彼らは円環を断ち切ることを許しませんでした。

光の木が完成すると、他の惑星にまで伝わっていくのが原因でした。

彼らは宇宙の現状維持を望んだのです。

宇宙は実はもろく、何かあつたら耐えられないから。

天使は以前よりも多くの特別な力を持った少女たちを図書館に差し向けました。

あの時は実に大変だった。

以前から危惧されていた問題がついに表面化したのだ。

ミラーズを通して、世界中から少女たちが集まったのだ。

それでも、鉄雄は円環を断ち切ろうとした。

そこでチヨルチンは剣を捨てました。

そして、沈黙を貫きました。

少女たちはそれで悟ったのです。

天使に騙されていたことを。

何しろ、天使が伝えたチヨルチンは悪い人間だったから。

本当のことを言うと、まだ鉄雄たちを信じることができない魔法少女はいた。

だが、そこで立ち上がったのは村宮だ。

彼は人を信じることの尊さを説いたのだ。後の妻であるちかと一緒に。

ますます、図書館に人が増えました。

そして、ついにその時はやってきました。

図書館は光を放ち、新たな光の木が完成したのです。

四日間、世界は光に包まれ、その後闇がやってくることはありませんでした。めでたしめでたし……。

そうそう、これはまったくの蛇足というか余談だが……

絵本のタイトルの案にはこのようなものがあつた。

(まどマジ世界の) 二十世紀人、(まどマジ世界の) 未来で英雄になる

まあ、当然ボツになったのだが。思いついた九郎はヨヅルに尻を叩かれた。

そして、本当はもう少しだけ続きがあるのだ。

光の木が立った後、ほむらにそっくりな少女が現れて言ったのだ。

「これ以上の逸脱は許されないわ。」

あなたたちは円環で回るだけの存在だから。

もうこれ以上、宇宙に予測不能な要素を与えないで」

おかげで、神浜市はもつとボロボロになつてしまった。

だが、人々は前に進むことができたのだ。

ほむらにそっくりな少女は本人に倒された。

「はい、ほむらちゃん、お説教だよ」

「や、やめて、まどかー! いやあああ!」

そのまま、まどかそつくりの女神に連れていかれた。
これでおしまいだ。

子孫たちを家に帰らせた後、男はハーブの奏者に会いに屋上に向かった。
屋上にはきれいな泉が湧き出ていて、それが図書館の水源でもあった。

「久しぶりだな、栗栖」

「あら、朗生くん。久しぶりね」

そこには数百年前と変わらない栗栖アレクサンドラがいた。

あの時代から生きている者たちは、今でも当時の言語と名前で話す。

男・・・朗生は彼女の隣に座った。

「もうそろそろ眠りについてたもんかと思ってたよ」

「そういうあなたもどうして眠らないの？」

「そうだな・・・」

彼は丘の上にある墓地を見つめた。

屋上は見晴らしがよく、カムイハマを一望できるのだ。

かつて神浜と呼ばれた都市は、今ではのどかな田園都市だ。

「理由はお前と同じだと思っぞ。」

レナを覚えていられるのは、俺だけだから」

「私もそう……先生を覚えていたから。」

もう、顔も声も忘れちゃったけど、それでも覚えていたいの」

二人は人間のように死ねなかった。

天辺をめざしていたネオマガウスは一步上の段階に行ってしまったのだ。

そして、朗生はネジレの影響がずっと残り続けた。

なにしろ、子孫にまで羽根が生えているくらいだ。

まあ、望めば永遠の眠りにつくことはできるのだが。

藍家ひめなはそうなのだ。

彼女はかつての恋人をよみがえらせることに成功した。

そして、彼が天寿を全うすると、彼女もついていった。

「……あら、二人ともこんな場所にいたんですね」

「おっ、かこ、久しぶりだな」

魔法少女はもともと不老不死に近かったが、

光の種の影響でもっと近づいてしまった。

まあ、大半はやめてしまったが。

人間に戻ることも優心の技術で可能になったのだ。

レナだってそうした。ほむらだってそうした。

ただ、かこは朗生たちと同じ理由で魔法少女であり続けた。そして、今でも館長であり続けている。

「最近はどこ行つてたんですか？」

「ゆまのところの会いにな。」

杏子も相変わらず元気だったぞ」

「それはよかったです。」

あつ、今から鉄雄さんの墓参りに行くんです。

お二人もどうですか？」

屋上には小さな林がある。

その一番奥に、鉄雄の墓があるのだ。

三人でささやかな散策道を進む。

墓の前では九郎が昼寝をしていた。

おおかた、ヨヅルから隠れているのだろう。

まあ、ご愁傷さまというべきか。

ヨヅルもまた彼のそばで眠っていたのだから。

起きたら面白いことになるだろう。

鉄雄の墓はどちらかという、記念碑に近い。

墓碑には遙か昔の詩人の詩が刻まれていた。

失くしてしまつたのです。

何をどこで失くしたのかも知らないまま

両手がポケットをまさぐり

道へと出向いていつたのです。

石と石と石とが果てしなくつらなり

道は石垣をたばさんで伸びていきます。

垣根は鉄の扉を固く閉ざし

道の上に長い影を垂らして

道は朝から夕暮れへと

夕暮れから明けがたへと通じています。

石垣を手探つては涙ぐみ

見上げれば空は気恥ずかしいぐらい青いのです。

ひと株の草もないこの道を歩いていくのは

垣根の向こうに私が居残っているためであり、

私が生きているのは、ただ、

失くしたものを 探さねばならないからです。